●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 1 月 18 日(月) ― 1 月 24 日(日)

国　際　連　合　大　学（UNU）
公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 1 月 18 日(月) ― 1 月 24 日(日)

国　際　連　合　大　学（UNU）
公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年、日中国交正常化 30 周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、これまで 1,500 名近い中国の教職員を日本に招へいしてきました。

今回の国際連合大学国際教育交流事業・中国教職員招へいプログラムは、2016 年 1 月 18 日（月）より 24 日（日）までの 7 日間にわたり、中国の初等中等教育に携わる教職員等 98 名を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、中国政府教育部、日本の文部科学省と外務省、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市の各教育委員会、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2016 年 3 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目　次

第Ⅰ章　実施内容

1.　全体プログラム（東京）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2.　グループ・プログラム
　A グループ：熊本県荒尾市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
　B グループ：長崎県長崎市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　C グループ：石川県小松市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
3.　全体プログラム（福岡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

第Ⅱ章　コメントと提案

1.　中国教職員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
2.　受入れ教育委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
3.　受入れ校　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

付　録

1.　実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
2.　プログラム日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
3.　参加者リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
4.　関係機関リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
5.　文部科学省講義資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
6.　過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

第Ⅰ章

実施内容

1. 全体プログラム（東京）

2. グループ・プログラム
   Aグループ：熊本県荒尾市
   Bグループ：長崎県長崎市
   Cグループ：石川県小松市

3. 全体プログラム（福岡）

1. 全体プログラム（東京）

(1) 来日、オリエンテーション

「中国教職員招へいプログラム」の参加者 98 名が、2016 年 1 月 18 日（月）に来日した。

同日、滞在先のメトロポリタンエドモント本館 1 階「クリスタルホール」にて、オリエンテーションが行われた。まず、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部部長の進藤由美が参加者へ歓迎のあいさつを述べ、その後 ACCU 担当スタッフの紹介と、プログラム日程説明や滞在ガイダンスなどを行った。

(2) 開会式・歓迎交流会

同日夕方、オリエンテーションと同会場にて、開会式・歓迎交流会が開催された。国際連合大学サステイナビリティ高等研究所所長の竹本和彦氏、文部科学省国際統括官の山脇良雄氏、中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官の胡志平（HU Zhiping）氏ほか、ACCU からは理事の髙坂節三氏と三木繁光氏、および事務局長代理の二ノ宮正和が出席した。

竹本氏からは、「各地方で郷土料理などの伝統も味わいつつ、日本の教育現場の様子を直接見てたくさんのことを吸収し、日中両国の相互理解、友好に貢献してほしい」とのあいさつがあった。続いて、山脇氏より、「滞在中に得られた経験を帰国後の教育現場で生かすとともに、日中関係をより前進させるために日本のありのままの姿を子どもたちに伝えてほしい」とのあいさつがあった。髙坂氏は、中国発祥の漢字文化が時を経てアジアの共有財産となっていることを例に挙げ、文化協力による国際交流の発展という側面から本プログラムへの期待を述べた。胡氏からは、「この貴重な機会を生かして日本の教育制度について学び、また日本の学校や教育施設訪問の際には子細に観察して、その成果を自国での教育現場で生かしてほしい」とのあいさつがあった。

各代表あいさつの後、中国教職員訪問団を代表し、団長で甘粛省教育庁処長の趙海峰（ZHAO Haifeng）氏から、「滞在中の日々を大切にし、日本の先進的な教育理念や方法を学びたい」と返礼のあいさつがあった。

記念品交換の場では、竹本氏から趙氏へ記念品が手渡され、趙氏からも記念品が贈呈された。続いて、山脇氏より胡氏へ記念品の贈呈が行われ、胡氏からも記念品が贈られた。

三木氏の乾杯の音頭で食事と歓談が始まり、訪問団員たちは和やかに懇談に興じていた。

歓談する山脇氏（左）と趙氏（右）（歓迎交流会）

(3) 講義

プログラム第 2 日の 1 月 19 日（火）午前、ホテルメトロポリタンエドモント本館 1 階「クリスタルホール」にて、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課企画係長の時枝正和氏から「日本の初等中等教育の概要」と題して講義が行われた。

講義内容は以下の通りである。

Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度
- 学校体系
- 学校数、生徒、教員数
- 在籍者数、就園率・就学率の経年変化
- 義務教育制度の概要
- 義務教育費国庫負担制度の概要
- 教科書無償給与制度
- 教員養成・免許制度の概要
- 教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）
- 学習指導要領とは

・学習指導要領改訂の視点
Ⅱ．日本の教育政策の一部の紹介
ⅰ）チーム学校
ⅱ）全国学力・学習状況調査

講義の後に設けられた質疑応答の時間では、「国の地方公共団体や学校に対する管轄の範囲」、「ICT の導入状況」、「私立、公立学校の違い」などの質問が挙がった。

メモを取りながら講義に耳を傾ける中国教職員（講義）

(4) 東京都内近郊学校訪問

—A グループ—
日本大学豊山中学校・高等学校

同日の午後、A グループは日本大学豊山中学校・高等学校を訪問した。同校は、創立から 140 年の歴史があり、東京の総合大学附属の学校として唯一の男子校である。生徒の大多数が大学進学をし、部活動も盛んで、水泳部はオリンピック選手を輩出している。また、2015 年に新校舎が完成し、地上 11 階・地下 2 階の最新設備を備えている。

学校に到着後、アリーナ 2 階に案内された訪問団は、吹き抜けの階下から吹奏楽部による迫力ある演奏で華やかな歓迎を受けた。その後大会議室へ移動し、歓迎レセプションが行われた。レセプションでは、高等学校教頭の柳沢一恵氏より歓迎の言葉が述べられた後、甘粛省蘭州市教育局副組長の韓仁孝（HAN Renxiao）氏より、吹奏楽部の演奏についての賛辞とともに、生徒の育成方法等を学びたいとの意欲的なあいさつがあった。また、同校広報主任の田中正勝氏より学校説明が行われた。

その後の昼食交流では、訪問団数名ずつが 7 つのクラスに分かれ、生徒との交流のひとときを楽しんだ。名前を黒板に漢字で書いて自己紹介するなど、言葉の壁を越えて積極的に交流を図っていた。

昼食後、隣接する護国寺を散策した。日本最古の茶室といわれ、国の重要文化財にも指定されている月光殿の見学のほか、住職らによるお茶のもてなしを受けた一行は、貴重な日本の伝統文化体験に大変感動した様子であった。

再び学校へ戻り、英語や体育などの授業見学、図書室などの校内施設見学と卓球や鉄道模型などの部活動見学をした後、情報交換会が行われた。校長の深田大介氏よりあいさつが述べられ、団長の趙海峰（ZHAO Haifeng）氏より記念品が贈呈された後、質疑応答の時間となった。教員、生徒、保護者の代表が出席していたため、おのおのの視点から意見を聞くことができた。教員へは修学旅行の運営や保護者に対する指導について、保護者へは子どもを同校に入学させた理由、生徒へは親と意見が対立したときどう対処するか、などの質問が上がった。訪問団は、多くの収穫を得て、同校の学校訪問を終了した。

茶の湯を体験する訪問団
（日本大学豊山中学校・高等学校）

—B グループ—
市川学園　市川中学校・市川高等学校

B グループは千葉県にある市川学園市川中学校・市川高等学校を訪問した。同校は 1937 年に男子校として設立し、2003 年に男女共学校に移行した。教育の理念である『独自無双の人間観』『よく見れば精

神』『第三教育』をベースに、「学力」「教養力」「科学力」「国際力」「人間力」の 5 つの力を中心とした「リベラルアーツ教育」を実践している、文武両道に励む自由で明るい校風が特徴の私立の中高一貫校である。

一行が到着すると、多目的ホールにて歓迎式典があった。初めに理事長の古賀正一氏より、同校では国際的に活躍する品格あるリーダーの育成を目指している、今日は先生方とお会いできるのを楽しみにしていた、とあいさつがあった。次に校長の宮崎章氏より、同日のスケジュールについて案内があり、続いて訪問団を代表して内モンゴル自治区教育庁副主任の格日楽図（GERILETU）氏が、今日の訪問の受入れに感謝している、貴校の建学の精神の一つである「第三教育」について学びたい、とあいさつした。続いて、古賀氏と格日楽図氏が記念品交換した。

次に昼食をとりながら、中国語のできる同校の生徒との交流の時間が持たれた。生徒が自宅から持ってきた弁当を珍しそうに観察したり、学校生活について話したりと、生徒と交流した訪問団は、とても充実した時間を持つことができた。

次に 2 グループに分かれて、授業参観があった。中学の国語の授業や英語の授業を参観した後、貴陽市第十九中学教研組長の何秀珍（HE Xiuzhen）氏が宋代の詩についての授業を、包鋼第三中学校長の耿紅麗（GENG Hongli）氏が中国の美しい景色についての授業をそれぞれ中学 2 年生のクラスで行った。はじめは戸惑う様子も見受けられたが、漢詩の美しい響きや美しい景色は国境を超えるものであるとの言葉に、生徒の心にも漢詩の美しさが届いた様子だった。

続いて、多目的ホールに戻り学校概要説明と教職員の意見交換があった。学校概要説明では、宮崎校長より生徒数や歴史、建学の精神などについて説明があった。続いて行われた意見交換では、同校の教育指針の一つである「第三教育」について、多くの質問が挙がった。

続いて一行はクラブ活動を見学した。はじめに國枝記念国際ホールに入ると、100 名以上のブラスバンド部員による「春の道を歩こう」や「男はつらいよ」の演奏に圧倒され、演奏が終わると訪問団はスタンディングオベーションで生徒たちに応えた。その後卓球場や剣道場などを見学し、最後に副校長の及川秀二氏が、このご縁を大切に、今後もつながりをもっていきましょう、とあいさつし生徒や教職員に見送られながら一行は同校を後にした。

生徒との給食交流の様子
（市川学園　市川中学校・市川高等学校）

―C グループ―
立教池袋中学校・高等学校

C グループは東京都豊島区にある立教池袋中学校・高等学校を訪問した。同校は、1874 年にアメリカ聖公会の宣教師 Channing M. Williams によって創立された中高一貫の私立男子校である。

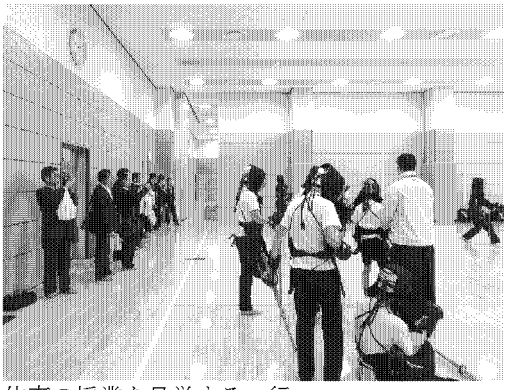
到着後、隣接する立教大学の第一食堂 2 階の「藤だな」に案内され、昼食をいただいた。食事が終わると同会場にて広報室長の初瀬川正志氏の司会進行のもと、歓迎レセプションが行われた。同校校長の鈴木弘氏が、「このように多くの先生方に訪問していただき、非常に幸せに思います。ICT の導入やグローバル化によって教育環境がめまぐるしく変化しており、そういった中で“交流”というものが非常に重視されております。このたび、中国の皆様と交流できることを非常にうれしく思います」と歓迎の言葉を述べた。また、訪問団を代表して江蘇省淮安市洪澤県教育局局長の高祝芹（GAO Zhuqin）氏が、「訪日後、最初の学校として貴校を訪問できることをうれしく思います。ここでたくさんのことを学ばせていただきたいです」と答礼した。続いて、鈴木氏と高氏の記念品交換が行われた。

歓迎レセプションを終えると、中学校・高等学校の校舎へと移動し、会議室にて社会科教諭の市橋祐介氏より学校説明が行われ、同校の成立および建学の精神、教育目標、中高一貫教育、特別聴講制度など大学との連携などが紹介された。また、同校の特色として、豊富な選択授業、卒業研究論文の作成、充実した学習環境などが写真や資料などと共に紹介された。また、学校説明を受けての質疑応答の時間が設けられ、「中高一貫校の入試制度はどうなっているのか」、「他大学へ進学するケースはあるか」、「（立教大学の）就職率はどれくらいか」などさまざまな質問があがった。

続いて初瀬川氏、市橋氏および生徒部部長の鈴木利彦氏の案内のもと授業参観が行われ、国語、社会、英語などの授業を見学した。特に英語の授業では、すべての英語教室に電子黒板が導入されており、また少人数制の授業が実施されているなど訪問団の注目が集まった。休憩をはさみ、職員室を見学したのち、体育館へ移動した。体育館では温水プールやトレーニングルームといった充実した設備のほか、剣道、卓球、バスケットなどの授業を見学した。続いて、情報室へと移動し、家庭科の授業を見学した。この授業は、「住生活をつくる」という単元で、ソフトウェアを用い住まいをデザインするという内容であった。

授業参観および施設見学を終え、会議室に戻ると、生徒との交流時間が設けられた。「中国について知っていること」、「最も興味関心の高い教科」、「海外経験はあるか」、「留学はしたいか」、「どうしてこの学校を選んだのか」などさまざまな話題で交流がなされた。その後、初瀬川氏、市橋氏に加えて、教頭の増田毅氏、事務長の片岡昌史氏、英語科教諭の安原章氏が出席するなか意見交換会が行われた。「教師のやりがいについて」、「学校の誇りに思う点について」などの話題があがったほか、「英語の授業が非常に充実していたが、ネイティブと日本人の教師の比率はどれくらいか」、「英語教師は全員英語専攻か」、「私立校ではどのように教職員の評価をするのか」など授業参観を踏まえた質問も多くあがり、有意義な時間となった。

最後に記念撮影をし、あたたかい見送りを受けながら一行は同校を後にした。



体育の授業を見学する一行
（立教池袋中学校・高等学校）

2. グループ・プログラム

A グループ：熊本県荒尾市

プログラム第 3 日の 1 月 20 日（水）から第 5 日の 1 月 22 日（金）までの間、A グループ 33 名は熊本県荒尾市を訪問した。同市は辛亥革命を支援した宮崎滔天の故郷で孫文も 2 度訪問し、市として日中友好に積極的である。今回は同市教育委員会の協力のもと、小学校 2 校、中学校 1 校と文化施設を訪問した。

受入れにあたっては、指導主事の上原泰氏を中心にご準備いただき、期間中も訪問団に同行していただいた。

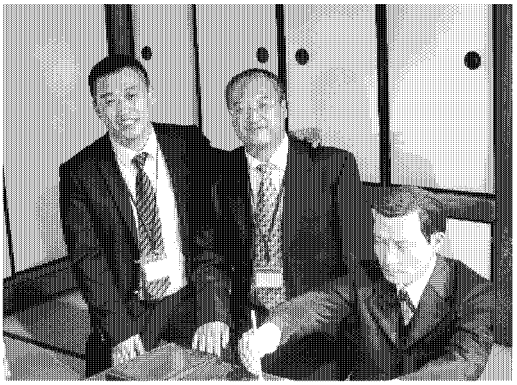
(1) 市長・教育長表敬訪問

プログラム第 3 日の 1 月 20 日（水）午後、寧夏教育庁の副処長である王淑萍（WANG Shuping）氏をグループ長とする A グループ一行は、荒尾市役所にて荒尾市市長の山下慶一郎氏と荒尾市教育委員会教育長職務代理者の境民子氏を表敬訪問した。山下氏からは、「中国との縁が深い荒尾市に中国教職員の皆様をお迎えできたことは市民の喜びである。本プログラムが将来、日中両国の友好や相互理解に関し多くの成果を生み出すものと確信している」とのあいさつがあった。続いて、境氏からは「「生きる力」を育むための教育を進める荒尾市の教育制度の現状を見ていただき、また子どもたちとの交流を通じて教育の相互理解と友好が促進されることを願っている」との言葉が述べられた。訪問団を代表して、王氏からは「日中両国が長年にわたって互いに学び、友好的に発展してきたのと同様、我々もまた学び、交流を促進するために荒尾市へやって来た。教育関係者の皆様との交流を通じて両国の教育事業を共に前進させていきたい」という返礼のあいさつがあり、記念品の交換が行われた。

市長、教育長職務代理者らと記念撮影
（荒尾市役所）

(2) 宮崎兄弟生家見学

その後、一行は市役所から徒歩で移動し、宮崎滔天らが生まれ育った生家を見学した。同じ敷地内には荒尾市宮崎兄弟資料館も併設され、同館スタッフの案内により、宮崎滔天と孫文との交流やエピソードについて説明を受けた。訪問団は、スタッフの中国語を交えた説明を興味深く聞き、当時の様子を再現した部屋では、孫文や宮崎滔天の蝋人形と記念写真を撮るなどした。



孫文の蝋人形と記念撮影する団長の趙海峰氏（右）と秘書長の陳会林氏（左）（宮崎兄弟生家）

(3) オリエンテーション

宮崎兄弟生家見学後、再び荒尾市役所へ戻り、オリエンテーションが行われた。荒尾市教育委員会指導主事の森川直美氏より同市の教育事情についての説明を受けた訪問団は、資料を見たりメモを取ったりしながら、限られた時間の中で理解を深めようと真剣に耳を傾けていた。

(4) 歓迎交流会

同日 18 時 30 分より、荒尾市内のホテルヴェルデにて同士主催の歓迎交流会が開催された。荒尾市教育委員会教育振興課課長の大神英子氏が司会を務め、荒尾市側より市長の山下氏、市議会議長の小田龍雄氏、同市教育委員会教育長職務代理者の境氏よりあいさつが述べられた。それに対し、訪問団を代表して西安市教育局副主任の魏振華（WEI Zhenhua）氏が「中国との交流を持続的に発展させてきた荒尾市から、ぜひ基礎教育について多くのことを学びたい」とあいさつを述べた。

同市教育委員会教育委員の西尾直子氏による乾杯の音頭で歓談が始まった。交流会には、訪問予定の学校の教職員をはじめ同市の教育関係者らが出席し、ボランティア通訳の協力によって日中の教職員間の会話も弾んだ。また、当日は地元の伝統文化を伝承している豊渕会による「肥後米音頭」や、市職員による「時の流れに身をまかせ」のサックス演奏が披露されるなど、交流会に花を添えた。さらには、同市側出席者と訪問団有志で「北国の春」「つぐない」を合唱し、最後は会場全員で輪になって「炭坑節」を踊った。荒尾市ならではのもてなしがちりばめられた交流会は、大盛況のうちに終了した。

「炭坑節」を踊る日中の教職員（歓迎交流会）

(5) 荒尾市立荒尾第四中学校訪問

プログラム第 4 日の 1 月 21 日（木）午前、一行は荒尾市立荒尾第四中学校を訪問した。同校は、荒尾市の南西部に位置する全校生徒 294 名の学校である。「燦たり四中　強い意志　豊かな心　確かな学力」を校訓とし、生徒会や委員会を中心に「いじめのない、明るく元気で楽しい荒尾四中」を目指している。

到着後、訪問団は迫力ある和太鼓、そして全校挙げての拍手と笑顔で迎えられた。同校教頭の米村光生氏より歓迎のあいさつがなされ、訪問団を代表して寧夏固原市弘文中学校長の任浩（REN Hao）氏がお礼の言葉を述べた。グループ長の王氏からは記念品が贈呈された。続いて、生徒会の 5 名の生徒が、年間行事などの学校概要を説明した。

授業参観は 2 グループに分かれ、前半は国語と体育を見学した。国語の教室では、西安高新第一中学芸術センター副主任の範勇（FAN Yong）氏と西安交大附中主任の任希林（REN Xilin）氏が、それぞれ習字や水墨画を披露・指導した。生徒らはその素晴らしい技術に感嘆の声をあげ、筆先をじっと目で追っていた。体育の授業では、生徒らが真剣に柔道の練習に取り組む姿を見学した。休憩を挟み、後半は家庭科の調理実習を見学した。熊本の郷土菓子である「いきなり団子」をはじめ、数種類の郷土菓子に挑戦している最中であり、訪問団は興味深そうに実習の様子を見て回った。一人ひとつずつ出来上がった菓子を試食し、「おいしい」と感想を述べていた。

授業参観を終えた後は、給食を食べながら教員や生徒との交流の時間が設けられた。教員との交流をしたグループでは、生徒の評価方法や学校行事、入試制度、給食、生徒の読書習慣などが話題に上っていた。生徒との交流をしたグループでは、訪問団から家族や将来の夢などについて質問があり、生徒のしっかりした受け答えに感心する場面も見られた。

和やかなひとときを過ごし、一行は生徒らに見送られながら同校を後にした。

水墨画を披露する中国教職員
（荒尾市立荒尾第四中学校）

(6) 荒尾市立中央小学校訪問

同日 2 校目は、荒尾市立中央小学校を訪問した。同校は荒尾市のほぼ中央に位置しており、児童数は 548 名と市内の小学校の中で最も児童数が多い。昨年度からは英語教育の特例校の指定を受け、全学級に配置してある電子黒板を活用し、歌やゲームなどで楽しく活動しながら、週 2 日の朝 15 分間全学年における英語学習を実施している。

同校に到着すると、校長の永尾則行氏をはじめとする教職員の出迎えを受け、図書室へ案内された。永尾氏から日程の説明等を受けた後、体育館へ移動して全校児童との交流会が行われた。交流会では、改めて校長より歓迎のあいさつがあり、訪問団からは陝西省西安師範附属小学副校長の牛西運（NIU Xiyun）氏より受入れに対するお礼が述べられた。児童の歓迎の歌に続いて、西安交大附小教諭の楊盛梅（YANG Shengmei）氏が、写真などを交え、中国の学校や子どもたちについての発表を行った。その後、児童から訪問団への質問コーナーとなり、「中国で一番大きな学校の児童数は？」「日本に来て一番驚いたことは？」「中国で人気の日本のアニメは？」との質問が挙がった。中国の学校の規模の大きさに驚いたり、自分たちと同じようなアニメを好きと知って共感を覚えたり、児童らにとっても中国に関心を深める良い経験となったようである。最後にグループ長の王氏より永尾氏へ記念品を贈呈し、皆の拍手で見送られて交流会は終了した。

続いて、6 校時には 2 グループに分かれ、英語、保健、道徳、理科、特別支援学級などの授業見学を行った。英語の授業では、担任教諭に促され、訪問団員が中国について紹介する場面もあった。

図書室に戻った一行は、教務主任の田中邦章氏より英語科や年間行事などを中心に学校概要について説明を受けた。その後の質疑応答では、いじめ問題や児童への心理的ケア、修学旅行などに高い関心が寄せられた。質疑応答の後、一行は永尾氏らに見送られ、同校を後にした。

グループ長の王氏（左）から記念品を受け取る校長の永尾氏（右）（荒尾市立中央小学校）

(7) 荒尾干潟見学

中央小学校訪問後、一行は荒尾干潟を見学した。荒尾干潟は有明海の中央部東側に位置し、単一の干潟としては国内有数の広さを誇る。多様な生物の生息地として国際的に重要性が認められ、2012 年にラムサール条約湿地に登録された。

あいにくの曇天で夕日を望むことはできなかったが、一行は思い思いに記念撮影をして景色を楽しんだ。

干潟をバックに記念写真を撮る団員（荒尾干潟）

(8) 松永日本刀剣鍛錬所見学

プログラム第 5 日の 1 月 22 日（金）午前、一行は松永日本刀剣鍛錬所を見学した。工房にて、刀匠の松永源六郎氏が伝統的な製法で日本刀を作る現場を間近で見学し、製造工程や特色についての説明に耳を傾けた。また、道場では試し切りの実演もあり、気迫に満ちた見事な振りを見学した。訪問団員のうち数名は、日本刀を実際に手にとって重さを確かめたり、装飾として施された精巧な彫りを興味深く眺めたりしていた。

試し切りの実演を見学する訪問団
（松永日本刀剣鍛錬所）

(9) 万田坑見学

続いて、一行は日本最大規模の炭鉱施設跡である万田坑を見学した。同施設は、2014 年 1 月に「明治日本の産業革命遺産九州・山口と関連地域」の一施設として日本政府からユネスコへ世界遺産候補として推薦され、2015 年 7 月に世界文化遺産として正式に登録された。ガイドの案内により、その成り立ちや各工程の作業室などについて説明を受け、炭鉱と共に発展した荒尾市の歴史的背景を理解することができた。

史跡を見学する様子（万田坑）

(10) 荒尾市立万田小学校訪問

同日午後、荒尾市立万田小学校を訪問した。同校は、2011 年 4 月に、荒尾市立荒尾第二小学校と荒尾市立荒尾第三小学校が合併し、開校して 5 年となる。児童数は 430 名である。「大好き！笑顔あふれる万田小」を校訓とし、「健康で確かな学力を備え心豊かな子どもの育成」を目指している。

到着後、同校図書室にて校長の寺尾俊二氏より歓迎のあいさつがあり、訪問団からは甘粛省蘭州市安寧区万里小学校長の潘一望（PAN Yiwang）氏が「万田小は自分が校長を務める万里小と名前が似ており、縁を感じる。異なる土の上で同じ使命を持って教育に携わっていきたい」とあいさつをした。

続いて、5 校時には 2 グループに分かれて授業見学を行った。低学年のクラスでは音楽、道徳、国語など、高学年のクラスでは家庭科、算数、書写などの授業をそれぞれ参観した。低学年の児童からは、訪問団一人ひとりに折り紙や新聞紙で作った手作りのプレゼントも贈られた。

6 校時は体育館にて 3、4 年生が群読と合唱、合奏で訪問団を歓迎した。「炭坑節」の合奏に合わせて児童と訪問団が輪になって踊る場面もあり、準備されたはっぴを着た訪問団は笑顔で踊りを楽しんだ。また、訪問団からはグループ長の王淑萍氏が一行を代表して中国の伝統舞踊を披露した。児童らは王氏の優雅な舞に見とれ、静かに鑑賞していた。

図書室に戻った一行は、同校教頭の森山資典氏より学校概要説明を受けた。学力向

上、校務改革、特別支援教育など、同校が重点的に取り組んでいる内容が紹介された。続く質疑応答では、「学力向上のための学習方法を具体的に教えてほしい」などの質問があがり、同校の教育活動をより深く理解し、参考にしたいという訪問団の積極的な姿勢が見られた。最後に、王氏より寺尾氏へ記念品を贈呈し、同校の訪問を終了した。

手作りのプレゼントを受け取る訪問団
（荒尾市立万田小学校）

(11) 情報共有会

一行は万田小学校の図書室で情報共有会を行い、翌日の報告会のための発表資料の準備をした。甘粛、寧夏、陝西の各省からの出身者で構成されていた A グループは、省ごとに 3 グループに分かれ、それぞれ活発な意見を交わしながらこれまでの日程を振り返った。

B グループ：長崎県長崎市

プログラム第 3 日の 1 月 20 日（水）から第 5 日の 1 月 22 日(金)までの 3 日間、B グループ 32 名は長崎県長崎市を訪問した。同市は原爆被災地として恒久平和を希求し、平和教育、国際理解教育を推進している。また、16 世紀のポルトガル船来航以来、異文化との接点として龍舟競漕など中国の文化も根付いている。今回は同市教育委員会の協力のもと、教育長・教育委員会表敬訪問の他、小学校 1 校、中学校 2 校、文化施設を訪問した。

(1) 長崎市教育委員会表敬訪問・オリエンテーション

1 月 20 日（水）午後、河北省教育庁副処長の郭立森（GUO Lisen）氏をグループ長とする B グループ一行は、長崎市教育委員会を表敬訪問した。

一行が長崎市役所に到着すると、教育長の馬場豊子氏より、歓迎のあいさつがあった。馬場氏は、長崎市が中国と歴史的に関わりの深い町であることに触れ、子どもの頃から華僑の友人と一緒に勉強してきたことなどを紹介し、今後も中国の都市と友好関係を築いていきたいと述べ、訪問団を歓迎した。その後、貴州省教育庁処長で訪問団副団長の歩嵐（BU Lan）氏が、今回の受入れのお礼を述べた後、4 つの省から成る B グループを紹介し、次は是非私たちが住む各省にも来てください、と述べた。

続いて、長崎市側の出席者の紹介があり、同市教育委員会学校教育部部長の酒井友文氏などが紹介された。続いて、長崎市の概要説明と長崎市の教育概要および教育施策説明があった。教育概要および教育施策説明では、心の教育の充実や小・中 9 年間を見通した「あじさいスタンダード体力づくり編」などについて説明があった。続いて行われた質疑応答では、教育委員会の組織について、心の教育でも評価は行うのか、児童生徒の評価、給食を提供できる仕組み、入試制度、などについて質問があがった。

最後に、学校教育課教育指導係参事兼係長の上西誠氏と歩氏が記念品を交換して

表敬訪問を終えた。

訪問団に歓迎のあいさつをする馬場氏
（長崎市役所）

(2) 歓迎交流会

同日 18 時 30 分より、長崎市内のホテルセントヒル長崎 3 階「あじさい」にて、同市主催の歓迎交流会が催された。はじめに、ボランティア通訳との顔合わせがロビーにて行われ、中国教職員は彼らに先導され、長崎市役所二胡愛好家による二胡の演奏に迎えられて入場した。

はじめに、同市教育委員会学校教育部部長の酒井氏が同市への訪問を歓迎し、長崎市は広東省中山市と交流があり、修学旅行の受入れを行い、生徒同士の交流があることなどを紹介した。続いて、グループ長の郭氏のあいさつがあり、今回の来日が決まってから 1 か月間日本語を勉強したこと、来日して日本には人・自然・食事の 3 つの美しさがあると感じたことなどを話し、日本の人びとと友情を築きたい、と述べた。

続く来賓紹介の後には、同学校教育部学校教育課課長の平山サナエ氏が、長崎市の自慢は人の温かさ・おもてなしの心であり、今回の滞在中に長崎市のおもてなしを感じてほしいと述べ、乾杯した後、歓談となった。

歓談中は終始和やかな雰囲気で進められ、また何度も乾杯するなど盛り上がりを見せる場面も多くあった。歓談の途中では、訪問団から長崎市の印象を述べる場や、ボランティア通訳の自己紹介の場が設けられた。最後に参加者全員で輪になって「北国の春」「蘇州夜曲」「夜来香」の 3 曲を歌い、歓迎交流会は三本締めにて大盛り上がりのうちに幕を閉じた。

長崎市の印象を述べる訪問団（歓迎交流会）

(3) 長崎市立朝日小学校訪問

プログラム第 4 日の 1 月 21 日（木）午前、一行は長崎市立朝日小学校を訪問した。同校は、「国際人育成の朝日小」の推進のため「外国語に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」を研究主題に、AE タイム（あさひイングリッシュタイム）の充実に取り組んでいる。たくさんの ALT を招待しての国際交流会や、定期的な外国語集会を設定し、日常的に英語が話せる児童を育てていくことを目指している。

一行は校門で同校の教職員らに迎えられた。まず、図書室に案内され、はじめに校長の元田美智子氏より、歓迎のあいさつがあった。同校は、長崎市で一番の英語教育を行っている自負があること、全校生徒 64 名、1 学年 1 学級の小さな学校というデメリットをメリットに変えることを日々意識していることなどが紹介された。続いて、訪問団を代表してフフホト市第十七中学校長の張瑞清（ZHANG Ruiqing）氏が、同校は小さな学校だが、素晴らしい成果を上げている、参観を楽しみにしている、と述べた。

次に、教諭の宇土剛氏による学校概要説明があった。はじめに行われた自己紹介では、昨夜の歓迎交流会にて、中国では「赤」が素晴らしい色と聞いたので、赤いシャツを着てきたことが紹介され、訪問団は大喜びの様子だった。概要説明では、経営方針・教育目標・目指す児童像などが説明され、同校の特徴の一つでもある英語教

育については、写真を使って詳細に説明があった。続いて行われた質疑応答では、日本社会の秩序の良さについて質問があがり、元田氏からは、教育現場でも児童の話をよく聞き、愛を以て接すること、子どもの心を大切にすることが日本社会の秩序作りに作用していることが語られた。

続いて体育館に移動して行われた全体交流会があった。はじめに、6年生の児童から、遠いところから来てくれて嬉しいと歓迎のあいさつがあり、続いて元田氏のあいさつ、訪問団からは、包頭市昆都侖区団結大街第四小学校長の闫華英（YAN Huaying）氏が、あなたたちの顔を見ていると自分の学校に戻ってきたようで嬉しい、大草原があるモンゴルに一度遊びに来てください、と述べた。続いて行われた「チャレンジタイム」では、長縄、縄跳び、けん玉、じゃんけんなどを通して、児童と交流した。最後に、記念撮影をし、一行は同校を後にした。

児童にけん玉を教わるグループ長の郭氏
（長崎市立朝日小学校）

(4) 長崎市立桜馬場中学校訪問

同日の午後、一行は長崎市立桜馬場中学校を訪問した。同校は国際社会に生きる良き日本人の育成を学校教育目標に掲げており、中国の学校との交流も積極的に行っている。

到着後、はじめに校長の今村勇氏のあいさつがあった。今村氏から、中国でめでたい色とされる「赤」のネクタイを締めてきたことが伝えられると、訪問団は同日2度目の喜びに沸いた。次に訪問団を代表して廊坊第八高級中学校長の徐永輝（XU Yonghui）氏が、「心を大切にする教育に興味がある。バランスのとれた質の高い教育を実践するため、貴校に学びたい」とあいさつした。続いて、記念品交換が行われ、訪問団からは景徳鎮の絵皿が、同校からは美術部の生徒から手作りの小物などが贈られた。

次に副校長の田川信一郎氏より学校概要説明があった。内容は、教育目標のほか、教育課程、部活動や課外活動などについてであった。

その後行われた授業参観では、中学3年生の数学や中学2年生の英語の授業等を見学した。続いて行われた情報交換会では、命の教育についての取り組みについて質問があがり、同校は道徳をはじめ理科、家庭科などの授業においても年間を通して全校で取り組んでいることが説明された。

その後、同校の部活動を見学した。小雨が降る極寒の中、袖なしの衣装を纏った和太鼓部の迫力に満ちた演奏を見学した訪問団からは、日本人の忍耐はこのように育まれるのか、といった感想があがった。その後見学したオーケストラ部では、「カヴァレリア・ルスティカーナより間奏曲」など3曲が演奏され、大満足の内に同校の訪問を終えた。

和太鼓部の演奏を聴く訪問団
（長崎市立桜馬場中学校）

(5) 世界新三大夜景　稲佐山見学

同日の夕方、一行は世界新三大夜景に認定されたという稲佐山を見学した。

駐車場でマイクロバスに乗り換え、頂上に到着したころには雪がちらつく極寒

の気温だったが、貴州省・河北省・内モンゴル自治区・湖北省という中国各地から集まった訪問団は、美しい長崎市の夜景を背景に一緒に写真におさまり、皆で同市を訪問できた喜びを分かち合った。

(6) 長崎市立淵中学校訪問

プログラム第 5 日の 1 月 22 日（金）午前、一行は長崎市立淵中学校を訪問した。同校は、「自ら学び、心身ともにしなやかでたくましい生徒の育成」を教育目標に掲げている。特に人権学習と平和学習には力を注いでおり、平成 26・27 年度は「平和教育」についての長崎市教育委員会の研究指定校として研究に取り組んだ。

同校に到着すると、ブラスバンドの演奏や拍手に迎えられながら、控室に入った。まず、校長の松本健吾氏のあいさつがあり、同校の歴史、生徒数、特徴が紹介された。次に、フフホト市教育局副局長の余澤強（YU Zeqiang）氏が、「意見交換や教職員との情報交換を楽しみにしている。今後も交流を促進してきましょう」とあいさつし、記念品を贈呈した。同校からは、生徒が書いた書などが贈られた。

続いて同校教諭の石隈亨氏より学校概要説明があり、同校の組織、中国との交流、授業の様子、行事などについて説明があった。次に授業参観があり、3 年生の数学や 2 年生の英語、1 年生の美術の授業を見学した。途中、教室に掲示してある「目標」の意味や掲示する意図を質問する場面が見られ、訪問団は日本の道徳教育について特に興味がある様子が見受けられた。

控室に戻ると、次に教職員との意見交換があった。河北省からの参加者は、教員が受けるプレッシャーについて質問し、同校からは中学では基本的な学習を身に着けさせたいとの方針で教育しているので大きなプレッシャーは感じないと回答した。また、貴陽市からの参加者は、「日本では生徒のチームワークを重視しているようだが、それをどのように育てているのか」と質問し、同校からは、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事の場や、学年集会などでチームワークを高めているとの回答があった。

最後に記念撮影をし、生徒や教職員に見送られながら学校訪問を終えた。

美術の授業を見学する訪問団
（長崎市立淵中学校）

(7) 出島（出島和蘭商館跡）、長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念会館見学

同日の午後、一行は出島（出島和蘭商館跡）を見学した。鎖国時代、唯一海外に開かれ、貿易・文化の拠点となった「出島」。一行は、長崎市経済局文化観光部次長兼出島復元整備室室長の馬見塚純治氏の説明を聞きながら、当時の出島の様子に思いを馳せ、日本の歴史の一端に触れた。出島を後にした一行は、長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念会館に向かった。同記念館は、中国革命の父孫文とその革命を支え続けた長崎市出身の実業家・梅屋庄吉の友情や、江戸時代から深い繋がりをもつ華僑の人びとと長崎の関係について紹介されている。歴史的にも長崎市と中国の関係の深さを再確認した一行は、同市を訪問できたことに感謝し、今後長崎市と中国の交流を促進することを誓った。

馬見塚氏の説明に聞き入る様子
（出島和蘭商館跡）

(8) 情報共有会

同日夕方、一行は長崎市民会館に向かい、今回の来日の成果や、今後の展望について話し合う、情報共有会を行った。ここで出た成果や意見などは翌日 3 グループ合同で行われる報告会にて発表された。

C グループ：石川県小松市

プログラム第 3 日の 1 月 20 日（水）から第 5 日の 1 月 22 日（金）までの間、C グループ 31 名は石川県小松市を訪問した。同市は、世界に誇る伝統工芸「九谷焼」、江戸時代から受け継がれてきた歌舞伎など、歴史と文化を市民と一体となり未来に守り伝えている。今回は同市教育委員会の協力のもと、高等学校、中学校、文化施設を訪問した。

(1) サイエンスヒルズこまつ見学

1 月 20 日（水）、悪天候による航空便の振替えのため小松市到着が予定より大幅に遅れた一行は、予定されていた安宅の関、空とこども絵本館訪問を中止し、空港到着後、すぐにサイエンスヒルズこまつを訪問した。

まずはじめに、日本最大級のドーム型 3D シアターを持つスタジオに案内され、3D と 2D のしくみについて説明を受けたのち、実際に映像を鑑賞した。続いて、ミラクルラボでは電子顕微鏡体験、フューチャーラボは 3D プリンターやレーザー加工機でものづくりをする過程を観察し、その仕組みについて学んだ。また、レゴのエデュケーションキットを用いたプログラミング体験を行った。最後に、ものづくりの現場と科学の原理を融合したコーナーであるワンダーランドを見学した。気象、光、てこ、歯車、電気、音、滑車などを扱った科学体験展示や、シリコーン樹脂の実験やバスの仕組みなどを扱うものづくり体験展示などバラエティ豊かな展示があり、日本の科学技術に触れることのできる、有意義な時間を過ごした。

プログラミング体験（サイエンスヒルズこまつ）

(2) 小松市市長表敬訪問・オリエンテーション

プログラム第 4 日の 1 月 21 日（木）、一行は小松市役所を訪問した。

市庁舎 3 階に案内されると小松市教育委員会学校教育課指導主事である東口幸央氏の司会進行により、市長表敬訪問が行われた。市長の和田愼司氏より、「ようこそ小松へお越しくださいました。3 日間ということで、小松市のよさを堪能していただくには十分な期間とは言えないかもしれませんが、小松市の思い出を一つでも多くお持ちかえりいただければと思います」と歓迎のあいさつがあった。続いて、グループ長で安徽省教育長調研員の鄭徳新（ZHENG Dexin）氏はあいさつで、「“百聞は一見に如かず”というが、貴市を訪問し交流することにより、日本の教育について全体的な理解を深めたい」と決意を表明した。その後、両氏による記念品交換が行われ、閉式となった。

続いて、会場を 7 階会議室へと移しオリエンテーションが行われた。まず、東口氏より、同市の教育についての説明があった。生きる力や確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の育成のためのさまざまな取り組みや、家庭地域の連携や学校間の連携について説明があった。また、充実した特別支援教育、国際理解教育、スポーツ・文化活動についても紹介があった。説明終了後、質疑応答の時間が持たれ、「学区について」、「小学校での特別支援学級について」、「安全指導について」、「まじめに授業を聞かない児童生徒の指導方法」、「外国語教育の開始時期」、「児童生徒の放課後の過ごし方」、「教育委員会の管轄の学校の評価方法」、「校長の選抜方法」などさまざまな質問があがった。

記念品交換（左：鄭徳新氏 右：和田愼司氏）

(3) 小松市立高等学校訪問

同日午後、一行は小松市立高等学校を訪問した。同校は、小松市立の普通科の高等学校で、音楽と美術の芸術コース（各学年 1 学級）を有する。部活動では女子ハンドボール部が毎年インターハイに出場しており、その他、カヌー部、吹奏楽部が優秀な成績を残している。

一行が学校に到着すると、会議室にて同校教頭の福岡茂雄氏の司会進行のもと歓迎式が行われた。同校校長の友田孝氏が「我々教職員や生徒たちと交流していただくことで、ぜひ日本の教育の一端を理解していただきたいと思います。ひいてはこの機会が日中教職員間のネットワーク構築に寄与し、さらに日中両国の相互理解と友好促進の一助となることを心より願っております」と述べた。続いて、訪問団を代表して貴州省貴陽市教育局国際処処長の陳咏利（CHEN Yongli）氏が答礼として、「貴校を訪問できて非常にうれしく思います。貴校の特色のある活動や、先進的な学校管理の方法などを学び、帰国後に中国の初等中等教育の発展に活かしたいと思います」と述べた。続いて、友田氏と陳氏による記念品交換が行われた。その後、同校教務課の古谷利彦氏による学校概要説明が行われた。最後に歓迎演奏が行われ、芸術コース音楽専攻の生徒が「ハナミズキ」のサックス四重奏と「荒城の月」の合唱を、合唱部が校歌を披露し、拍手喝采を浴びた。

休憩をはさみ、施設見学および授業参観が行われた。少人数かつ ICT を活用した生物、物理、数学の授業や芸術コースの美

術の授業を見学した。続いて、2万2千冊以上の蔵書数を誇る図書室、情報の授業でのタイピング練習、芸術コースの声楽の授業などを見学した。授業見学が終わると、生徒との懇談会が行われ、同校の生徒からは、「中国の高校生に人気のある職業」、「中国で人気のある日本料理」、「中国の学校の行事」などたくさんの質問があがった。また、中国の教職員からは、「小学生のときは、学校が家から遠かったか」、「両親も同じ学校出身か」、「制服を何着持っているのか」、「生徒会をどのように選ぶのか」などといった質問があがった。

生徒との懇談会終了後、友田氏があいさつをし、「短い時間ではありましたが、皆様方と交流することができ大変喜ばしく思っております」と述べた。また、訪問団を代表して甘粛省蘭州市第五十五中学校長の馬秉禄（MA Binglu）氏が、「授業を見せていただき、また教職員や生徒との交流をすることで、多くのことを学びました。今後、日中の教育がお互いに良い影響を与え合い発展していくことを願っています」と感謝の意を表した。最後に記念撮影を行い、一行は同校を後にした。

美術の授業を見学する一行（小松市立高等学校）

(4) 歓迎交流会

同日 18 時 30 分より、小松市内のホテルサンルート小松にて、同市主催の歓迎交流会が催された。まずはじめに、小松市教育委員会教育長の石黒和彦氏より、「この交流を通じて日本と中国の絆が一層深まり、今後も多くの交流が育まれることを期待します」と歓迎のあいさつがあった。続いて、グループを代表して江蘇省教育庁副処長の殷雅竹（YIN Yazhu）氏が答礼として、「小松市を訪問できたことを非常に嬉しく思います。今後もこのような交流を持続的に続けていき、グローバル化する社会の中で共に発展の道を進んでいきましょう」と述べた。小松市教育委員会シニアマネージャーの柿本欣也氏が中国語で書かれたサインボードを用いながら乾杯の音頭をとると、楽しい歓談の時間が始まった。この交流会ではさまざまな料理だけでなく、両国の出席者が一緒に楽しめるプログラムが用意されていた。中国語での小松市紹介映像鑑賞が流され、それが終わると、日中質問タイムとして相互に質問をする時間が設けられた。食事や乾杯のマナー、小松市イメージキャラクターのカブッキーについて、外国語教育や海外研修についてなどさまざまな話題があがり、両国の参加者が相互理解を深めた。また、音楽交流の時間も設けられた。まず、小松市立高等学校事務長の堀威智郎氏のギター演奏があり、続いて日中両国の教職員が「北国の春」を一緒に歌った。そして、中国からは馬氏が、「我的中国心」を披露した。最後には、ビンゴ大会が行われ、交流会は大いに盛り上がりを見せた。小松市教育委員会事務局学校教育課課長の波佐尾雅人氏が、「30 年前に訪中した際、素晴らしい国だと思いました。国、社会への熱い想いを感じました。これからも近い国同士、末永く付き合っていきたい」とあいさつをし、友好的な雰囲気の中、交流会は幕を閉じた。

「北国の春」を一緒に歌う両国の教職員
（歓迎交流会）

(5) こまつ曳山交流館みよっさ見学

プログラム第 5 日の 1 月 22 日（金）午前、一行は、「歌舞伎のまち・こまつ」の魅力を伝えるこまつ曳山交流館みよっさを見学した。到着すると館長の橘雅江氏より、小松市における歌舞伎についての説明があった。女性が歌舞伎を演じるようになった経緯や、釘を一本も使用していないという曳山、また曳山の組立て方法などについて説明を受けた。また、中学校 10 校が持ち回りで「勧進帳」を演じる、子ども歌舞伎についても紹介され、教育活動の中で伝統文化をどのように扱っていくかなど示唆に富んだ内容となった。説明が一通り終わると、曳山子ども歌舞伎 2015「大文字町・曽我十二時揚巻助六の場」の映像を鑑賞した。

続いて行われた、なりもの体験や衣装体験、踊り体験などにより、参加者は歌舞伎をはじめとする日本の伝統文化について理解を深めた。

なりもの体験（こまつ曳山交流館みよっさ）

(6) 小松市立丸内中学校訪問

同日午後、一行は小松市立丸内中学校を訪問した。同校は、小松市の中心部に位置し、校区に沿って流れる梯川や、近くに日本海があり、豊かな自然環境に恵まれている。自主自律の校風のもと、毎日意欲的に学習やスポーツに取り組んでいる。

学校に到着すると、まず、校長の浅野幸恵氏より、「違いを知り、そこから学ぶことはたくさんあると思います。お互いを理解し合うことが、平和な世界を築くことにつながると思っています。」との歓迎のあいさつがあった。また、浅野氏よりボランティア通訳の助田清華氏が紹介された。

続いて、訪問団を代表して安徽省馬鞍山市和県第四中学校長の張歩力（ZHANG Buli）氏が、「美しく活気にあふれた丸内中学校を訪問し、交流ができることを非常にうれしく思います」と答礼した。そして、浅野氏と張氏の記念品交換が行われた。

次に、学校概要の説明があり、教育目標、学校像、経営目標、日課表、校舎の特徴、年間行事、部活動などについて説明があったほか、同校の特色ある活動として読書教育、環境美化、古典教室などが紹介された。説明終了後の質疑応答時間には、「校長と教諭間の交流」、「学校でどのような研究を行っているか」、「教職員の異動について」、「読書活動と受験勉強の関連性」などさまざまな質問があがった。続いて、2 つのグループに分かれて授業参観が行われた。チーム・ティーチングで行う英語の授業や、図書室での調べ学習、アートガラスをつくる美術の授業のほか、歴史、理科、体育などを参観した。また、保健室、調理実習室といった施設も見学した。授業参観が終わると各教室で生徒と一緒に給食をとり、楽しいひとときを過ごした。給食後は各学年ごとに中国教職員による授業が行われ、中国の学校生活や伝統文化などが紹介された。

休憩をはさみ、体育館にて全校生徒が出席する中、歓迎会が行われた。生徒会長からのあいさつの後、歓迎演奏が行われた。その後、生徒会活動の紹介および各委員会の活動内容についての発表があり、特に文化・環境・選挙管理委員については詳細な説明がなされた。同校生徒による校歌斉唱の後、訪問団を代表して甘粛省蘭州市第三十一中学校長の陳宝亭（CHEN Baoting）氏が、「たくさんのことを学ぶことのできる貴重な機会をくれた丸内中学校の皆様に心から感謝します」と礼を述べた。歓迎会終了後、休憩をはさみ、掃除や部活動の様子を見学し、一行は同校を後にした。

校長の浅野氏（前列左から 5 番目）を囲んで
（小松市立丸内中学校）

(7) 情報共有会

同日夕方、一行は小松市教育センターに向かった。同施設では、翌日に福岡で行われる報告会に向けて、約 1 時間の情報共有会が行われ、今回の来日の成果について話し合い、発表資料などを準備した。

3. 全体プログラム（福岡）

(1) 報告会

プログラム第 6 日の 1 月 23 日（土）午後、福岡市内にある TKP 博多駅前シティセンターの会議室にて報告会が行われた。会には、中国教職員 96 名のほか、中華人民共和国駐福岡総領事館領事の丁剣（DING Jian）氏と今回 B グループの受入れ担当としてご尽力いただいた長崎市教育委員会学校教育課指導主事の久松千樹氏が出席した。報告会では、各グループ代表より 20 分ずつプログラムの感想、成果などについての発表が行われた。各グループの報告は以下の通りである。

—A グループ—

熊本県荒尾市を訪問した A グループを代表して、甘粛省蘭州市西固区福利路第二小学校長の王建萍（WANG Jianping）氏、寧夏長慶小学教務主任の景小雲（JING Xiaoyun）氏、西安市雁塔区翠華路小学教諭の盧焱（LU Yan）氏の 3 名が報告を行った。

今回のプログラムで A グループ 33 名は 4 校を訪問し、学校現場でどのように教育実践が行われているかを実際に見ることができた。

初めに、王氏による以下の 3 点の報告があった。

1. 日本の教育は人間力を養うことを重視していた。家庭科での裁縫の授業やお弁当作り、小学 1 年生から床拭きの掃除をするという経験は人間性を養うものであると感じた。また、特別支援学級では、尊重する心や、心をいたわる教育方法が実践されており、個人を大切にした教育であることがわかった。
2. 総合的な能力の育成が重視されていた。学力の向上だけではなく、部活動や体育祭、文化祭、プールの整備、式典等のイベントでは、身体能力や忍耐力が養われていた。
3. 伝統文化が継承されていた。漢詩や陶芸、民謡といった文化的な学習がされ、社会科の授業では、日本の伝統的な生活様式が紹介されていた。茶道や書道についても驚くほど継承されていた。

最後に、王氏は、教育は農業のようなものである。細やかに工夫して、生徒に花を咲かせることが重要であり、教育の原点である、と述べた。

次に、景氏による以下の 3 点の報告があった。

1. 日中両国は文化的、歴史的に深い繋がりがある。東京の護国寺は、中国の書道家の王羲之を描写して建てられ、宮崎兄弟資料館では、宮崎兄弟が中国の辛亥革命を支えた事が紹介されており、日中文化の緊密な繋がりと歴史の長さを感じた。
2. 日本国民の秩序の良さや礼儀正しさを感じた。空が青く、道は清潔で、車両はルールを守っていることに感心した。また、ゴミの分別の厳しさは想像以上であった。
3. 日本の教育は実践性がある。小学 1 年生は、冬でも半袖半ズボンで体育に励み、道の渡り方といった生活のルールについても学んでいた。これらの教育は、子どもたちの健康を大切にし、生きる力を身につけている教育であることがわかった。

最後に盧氏による以下の 3 点の報告があった。

1. まず心から感謝を述べたい。今回の訪問の成功は心からのおもてなしがあったからである。
2. 大きな収穫があった。日本の教育が実践的であることに気づかされた。各学校で実施されている教科はさまざまで、問題提起、問題解決能力を養うものが多いと感じた。
3. 日本の先生と生徒と広い交流ができた。中国の学校の書道や絵を紹介できたこと、私たちの質問にも丁寧に答えてもらえたことで、相互理解に繋がった。お互いの教育レベルを高め、良いものにしていきたい。

最後に盧氏は、唐の時代の李白の詩「送友人」を引用し、「私たちはさよならをしますが、繋がりを大切にしましょう。みなさまのご来訪を心よりお待ちしています。歴史ある西安にも是非ご来訪ください」と

報告を締めくくった。

A グループ発表者

—B グループ—

B グループを代表し、河北省教育庁副処長のでグループ長の郭立森（GUO Lisen）氏より報告があった。内容は以下の通りである。

B グループ 32 名は今回長崎市を訪問した。訪問を通して、日本の先生や生徒の熱意を感じた。長崎市の歓迎交流会で、中国では赤が好まれることを知って、翌日訪問した朝日小学校は校内が真っ赤に染まっており、その誠実さに団員は感動した。また、平和教育がすべての学校で行われていることに感動した。中国では、「海内存知己 天涯若比隣」という詩がある。たとえ遠くて離れても、心は軒続きの隣同士のように密接に結ばれているという気持ちを意味する。2000 年の間、日中は勉学の隣人として、アジアの発展を築き、友情を育んできた。日中の友情は種のようなものだ。私たち団員は、種をまく使者として中国の生徒のたちの心に友情の種に植え、アジアの未来を子どもたちに託したい。

最後に、B グループ全員が起立し、「ありがとう、ありがとう、ありがとう」と述べ、心のこもった感謝を表した。

プログラムへの感謝の意を表す B グループ

—C グループ—

C グループを代表し、江蘇省淮安市淮安区県教育局副局長の高雲海（GAO Yunhai）氏より報告があった。C グループ 31 名は今回小松市を訪問した。内容は以下の通りである。

1. 心の温かさを感じた。日本に対する印象は静かな川のようなものであった。今回の訪問では、訪問先の歓迎や歓送、丁寧な校長先生の説明、質問への丁寧な応答をしてもらった。すれ違う日本人の謙虚な姿、自立した姿が心に刻まれた。歌舞伎や文化施設、美しい自然を見て、人びとの真面目な精神を感じた。
2. 感動したことを以下に挙げる。
   ①徹底した教育の保障体制について。真の学力の育成、生きる力、豊かな心を養うことが学習指導要領に明記されていること。また、各学校に十分な運営経費が与えられていること。合理的な義務教育体制が整っていること。6 年に一度の異動制度によって、地域格差が是正されていること。
   ②大学進学については、推薦入試や AO 入試を導入し、知識重視に偏っていないこと。
   ③個人を尊重する教育。競争によって差をつけるのではなく、個人の成長に目を向けること。
   ④職業体験のプログラムについて。
   ⑤給食体験から感じた、生徒の秩序の良さ。
3. 学校が行う社会環境作りについて感心を持ったことを以下に挙げる。

①地域に根付いた文化と学習を結びつけていること。歌舞伎や科学技術館が代表例である。
②保護者が積極的に学校行事に参加していること。
③学校ごとに目標を持っていること。

最後に、高氏は「私たちは責任を果たさなければならない。定めている目標を徹底的に実行し、いろいろな国から学ぶこと。失敗も現場に生かしていきましょう」と述べた。

C グループ発表者

(2) 閉会式

報告会に続き、同会場にて閉会式が行われた。ACCU 人物交流部部長の進藤由美があいさつをし、「今回の体験、知見を帰国後皆様の教育現場で生かし、ご家族や地域の方々とも共有していただきたい」と述べた。

続いて、丁氏があいさつをし、プログラムでは日中の教育関係者が直接会って、意見交換を通じて日中両国の相互理解と友好促進に大きく貢献した。皆さん一人ひとりが日中両国の新時代の人的交流の使者であり、これから両国の教育交流に更なる貢献ができることを期待している、と述べた。

最後に団長の趙海峰（ZHAO Haifeng）氏があいさつをし、プログラムの期間中に気づいた日中の違いについて、「中国は教育重視の国で、イノベーションが重要視されている。一方で、日本は東洋の伝統と、西洋の個性や自主性を重視する教育を合わせていた。今回の訪問では、双方の基礎教育の相互理解を深め、友情を育み、新たな活力を生むことができた」と述べた。

閉会のあいさつの後、ACCU と副団長との記念品交換、また ACCU から各グループ長へ記念品贈呈が行われ、閉会式は幕を閉じた。

歩氏（左）から ACCU へ記念品が贈られた

(3) 太宰府天満宮見学、帰国

プログラム最終日の 1 月 24 日（日）午前、訪問団一行は太宰府天満宮を見学する予定であったが、記録的な大雪に見舞われ、やむなく行程を中止した。

各自昼食を済ませた後、ホテルロビーに集合し、福岡空港へ向かった。帰国便も悪天候による影響を受けたが、何とか全員無事帰国の途に就いた。

第Ⅱ章

コメントと提案

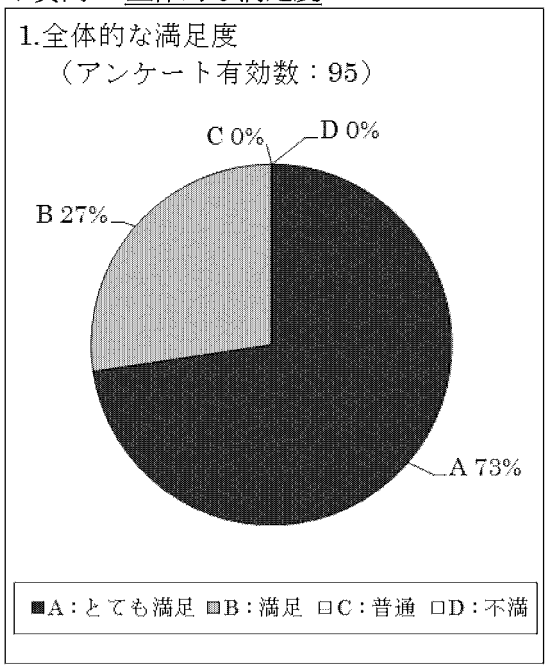
1. 中国教職員

2. 受入れ教育委員会

3. 受入れ校

1. 中国教職員

◆質問１.全体的な満足度



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（とても満足）
プログラム全体を通して、綿密に構成され、手配が行き届いていた。

A-2　陳会林 秘書長（とても満足）
日程はとても充実していて、期待していた成果が挙げられたと思う。

A-9　宋林生（満足）
約一週間の訪問を通じ、日本の現在の教育制度や具体的なやり方のみならず、日本の風土や習慣、歴史文化にも触れる機会を得た。日中友好のさらなる発展と両国国民の友情の促進についても理解を深めた。

A-12　王淑萍 グループ長（とても満足）
日本の文部科学省をはじめとする関係部門から行き届いたご手配をいただいた。プログラムのスケジュールがきっちりしていて、時間通りに進められた。訪問した学校は、それぞれ日本の教育現場を代表する異なる特色があり、熱心にもてなしてくださって、大きな収穫を得た。日本の教育理念とその具体的な活動について、深く理解できた。

A-29　任希林（とても満足）
今回の訪問のスケジュールは合理的で、内容も充実している。我々に日本の教育の現状を理解するための窓を開いてくれた。義務教育に携わっている者としての責任感と歴史的使命感を改めて認識した。同時に、現代の日本の義務教育から学び、参考にすべきところにたくさん気がついた。帰国後、きちんと成果をまとめ、生かしていきたい。

A-31　楊盛梅（満足）
今回の訪問は忘れがたい思い出になった。日本人の仕事熱心な姿に敬服し、日本の子どもたちの礼儀正しさに感心した。日本人の伝統文化の継承を重視しているところも大変素晴らしいと思った。

A-32　趙洪（とても満足）
今回のプログラムに対して日本側は責任感を持って真剣に取り組んでいた。スケジュールが合理的で、サービス精神旺盛で、至れり尽せりのおもてなしをいただいた。各活動を通じて違う視点から日本の小中学校の教育を理解することができ、大きな効果があった。

B-1　歩嵐 副団長（とても満足）
プログラム全体の内容が豊富かつバラエティーに富んでいた。スケジュールが合理的で、サービスも行き届き、深く交流できたと思う。日本側の皆が心血を注ぎ、心をこめてアレンジしていただいたおかげで、滞在中の活動が順調に効率よく進み、実り多い成果が挙げられた。

B-22　郭立森 グループ長（とても満足）
もてなしは温かく、用意周到である。内容が豊富で、仕事の効率がよかった。

B-24　劉君英（とても満足）
日本側のもてなしはきめ細やかで、内容も形式も多彩である。全体的な紹介や交流がある一方で、現場に行って第一線に立っている教師や児童生徒と直接に触れ合うことができた。1 週間という短い期間の中だ

ったが、日本の教育について確実に理解を深められたと思う。

B-29　馮蔵璞（とても満足）
本当に心のこもった手配をしていただいた。活動の目標がはっきりとしていて、マクロの視点からの政策の紹介があり、ミクロの視点からの学校訪問もある。訪問校については、有名な私立学校があり、公立学校もある。身を持って日本の文化と教育を体験することができ、日中両国の交流の歴史や文化のつながりも改めて認識することができた。

C-8　高平（とても満足）
日本人は真面目で、少しでもいい加減なことはしない。もてなし上手で、とても印象深かった。日本人の教師は真面目に仕事をし、仕事に専念している。生徒は礼儀正しく、努力家である。特に衛生上の習慣がとても良い。自立意識が強くて、他人を配慮する気持ちがとてもすばらしいと思う。

C-9　張歩力（とても満足）
今回の訪問には教育理論に関する説明、また具体的な学校訪問があり、とても実践的でよかった。

C-17　李萍（とても満足）
今回のプログラムの内容はとても充実していて、文部科学省や各市市長、教育委員会から教育政策などの概要の紹介があり、学校訪問もある。訪問した学校は日本の教育の現状を知るのに代表的な特徴と各自の特色を備えている。学校での交流活動もバラエティー豊かで、親しく交流を深めることができた。

C-33　趙艶（とても満足）
日本側と中国側からの至れり尽くせりのおもてなしと行き届いたご手配をいただき、大変満足している。

◆質問２.参加目的は何か

【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長
①日本の義務教育制度と学校管理について理解すること。
②日本の文部科学省から各階層の地方自治体までの教育部門の運営体制、役割分担および各レベルの教育の審査システムについて理解を深めること。
③日本の小中学校の修学旅行の具体的な運営方法を学びたい。

A-12　王淑萍 グループ長
日本は初めてなので、日本の自然環境や人文環境、教育環境などについて実際に身を持って感じてみたかった。そして日本の小中学校の教育の現状を知りたかった。

A-26　盧焱
相互理解を深め、初等中等教育におけるホットな問題について意見交換すること。実際に日本の子どもたちの学校生活と教師の仕事を見て、日本の良い面を学ぶこと。

A-29　任希林
今回の主な目的は、中国と日本の初等中等教育のレベルの差を知ること、そして日本の小中学校の ICT 活用の現状とこれからの展望についてである。このほか、日本の建築の現状と歴史的伝承についても興味があり、中国の古代建築が現代日本社会の中でどのように影響しているか調べてみたかった。

A-31　楊盛梅
日本の小学校の英語授業の状況について知りたい。

B-1　歩嵐 副団長
日本の小中学校の教育について基礎的な認識を得ることと、生きる力の涵養、部活動と日本の家庭教育の概要を知ること。

B-13　烏仁図亜
先進的な教育管理方法を学びたい。

B-22　郭立森 グループ長
学び、交流し、経験を分かち合い、成長を遂げたい。子どもたちにアジアの未来に関心を持ち、世界の平和と発展をリードしていくよう促したい。

B-29　馮蔵璞
義務教育の段階の教師の質の均衡はどうやって取っているのか。文部科学省の教育制度を知り、学校側はどうやってその教育制度を実現するのか。そして日本の文化についてもっと知りたい。

C-6　宋憲宏
現代教育の中で、いかに伝統を継承し、世界に向けて発信していくかについて知りたい。

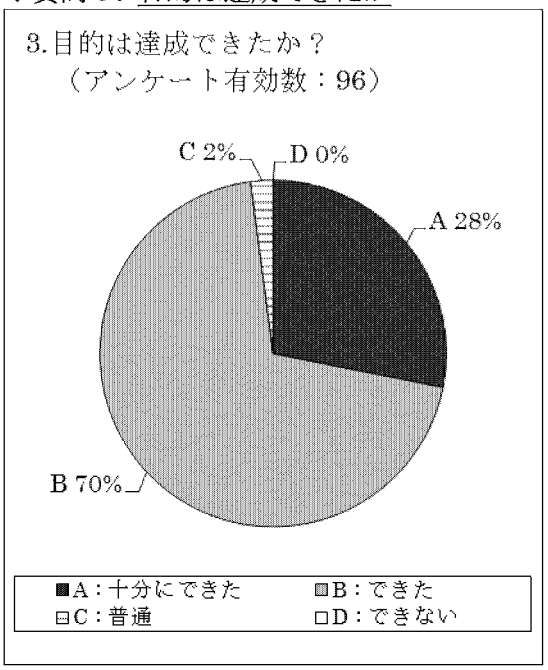
C-8　高平
学校訪問を通じ、日本の教育の現状を理解し、いいところを学ぶことが目的の一つである。そして一衣帯水の隣国である日中両国が相互理解を深め、とりわけ両国の青少年の友情を深めることがもう一つの目的である。

C-12　李鼎盛
日本の教育において、命と人権の尊重という理念がどのように指導に取り入れられているか、児童生徒の礼儀、生活習慣、道徳教育はどのように行われているのかについて学びたい。
また、日本の教職員と交流して意見を交わす中で自分を高め、今後の仕事に生かしていきたい。

C-17　李萍
日本の小中学校の外国語教育および国際交流の現状を理解すること。日本の学校における生徒指導と道徳教育についても知りたい。

C-27　李仁才
①子どもの学校活動と宿題の負担を知ること。
②日本における教師の評価方法について知ること。
③国際交流の現状について知ること。

◆質問３．目的は達成できたか



【主な意見】＊原文は中国語

A-7　潘一望（できた）
日本の全体的な教育制度、政策を知ることができ、また教師や児童生徒との交流、授業参観、部活動見学などから日本の先進的な教育理念を感じるとともに、自分の学校運営に不足している部分に気づいた。

A-24　任艶萍（できた）
修学旅行と児童生徒の道徳教育に関して、訪問した学校の教師と交流し、大まかな理解を得られたが、もっと深く知りたかった。

A-27　範勇（できた）
ほぼ達成した。ただ、同じ教科担当の日本人教師との交流をもっと持ちたかった。

A-28　楊文花（できた）
荒尾第四中学校を訪問し、日本の学校では学力を高めるために、知識の習得、自ら考える力をつけること、進路や将来の展望という 3 つの面を重視していることがわかった。例えば、中学 1 年生のときはいろいろな職業の人が各自の仕事内容を生徒に紹介する。中学 2 年生のときは実際に職業体験をする。中学 3 年生は進学のために勉強に重点を置く。3 つのプロセスを通じ、生

徒に自ら選び、学ぶという積極的な姿勢を身につけさせる。就業体験をさせることは生徒の将来にも良いことだと思う。

B-1　歩嵐 副団長（充分にできた）
最初に全体的な概要の紹介があり、次に学校訪問と個別交流を設けられたおかげで、目的を充分に達成したと思う。

B-7　金弋（できた）
礼儀や衛生を重視すること、時間を順守すること、食べ物を大事にすること、エネルギーの節約、自分のことは自分でやるという姿勢、そして環境保護などが日本の学校教育の中で私に極めて深い印象を与えた。

B-13　烏仁図亜（充分にできた）
各地域の教育長や、各学校の指導者、教師、生徒らが教育の概要や授業などについて詳しく説明してくださり、大変勉強になった。

B-25　楊富興（できた）
保護者との交流で、勉強になることが多かった。日本の子どもたちの習慣や、日常生活がわかった。

B-29　馮蔵璞（できた）
教師の質の均衡は各レベルの研修や教師の異動制度によって実現されていること、教師が同じ学校にいる時間は 3-6 年しかないこと、文部科学省の各制度やカリキュラムが着実に実現されている一方で、各地方にもそれぞれの特徴があることなどを学んだ。
訪問期間が短く、日本文化については深く理解することができなかったのが残念である。

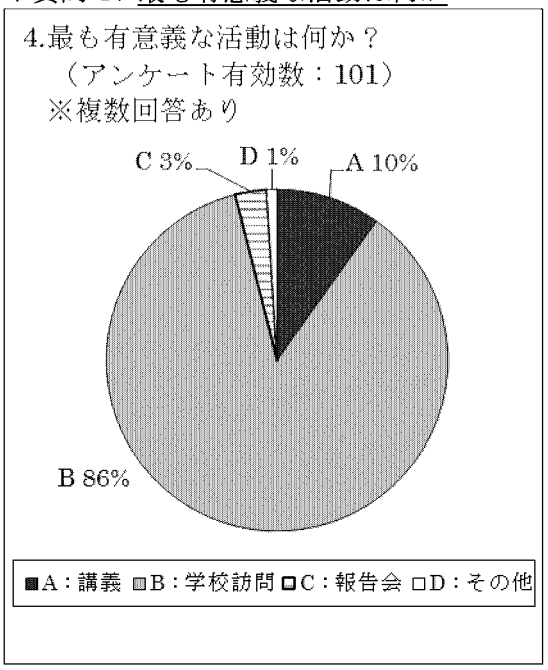
C-8　高平（できた）
日本の教育は子どもの個性を尊重し、健康的な生活と思いやりの心を育む教育を進めている。子どもたちは楽しく自由で、活発である。両国の青少年の友情を深めるためには両国ともに努力する必要があり、自分のできることを精一杯やりたいと思っている。

C-9　張歩力（充分にできた）
学校運営や管理方法については大変勉強になった。中国とは大きく異なっている。教師のやる気を引き出す方法についても勉強になるところが多かった。

C-13　舒清芳（充分にできた）
訪問を通じ、日本では各学校のレベルが大きく変わらず、子どもたちはどの学校でも公平に教育を受けられると分かった。生徒の宿題の負担が中国の生徒より小さく、学校では文化系や体育系の課外活動がたくさんあって、生徒たちは学校生活を楽しんでいることが分かった。

C-33　趙艶（できた）
授業参観や、講義、学校訪問を通じ、先進国の教育理念、効率の良い日本の授業方式、いろいろな部活動の管理運営の実例などを学んだ。

◆質問４．最も有意義な活動は何か



【主な意見】＊原文は中国語

A-2　陳会林 秘書長（学校訪問）
団員の反応がとても良かった。学校での見学と交流を通じて、日本の学校の実際の教育方法とその背景にある理念を理解する

ことができた。

A-24　任艶萍（学校訪問）
学校訪問を通じ、自分の目で見、自分の耳で聞き、身を持って体験することができた。日本の学校の具体的な教育方法を知ることができ、大変参考になり、また大いに啓発された。特に交流と質疑応答の時間が有意義で、確実な成果が得られた。

A-29　任希林（報告会、学校の説明会）
さまざまな形で教育活動をし、ゲームなどを授業に取り入れ、子どもたちを楽しく学ばせ、逞しく成長させることが日本教育の目的だと聞き、深く感銘を受けた。そして、彼らに優しさやチームワークの力、お互いに敬う気持ち、助け合い、人間関係の重視、共に成長していくことを教えているところがすばらしいと思う。

A-32　趙洪（学校訪問）
授業見学を通じ、教育現場の様子を直に学び、カリキュラムの設定や指導方法について詳しく知ることができた。課外活動見学によって、日本の子どもたちが楽しい学校生活を送っていることが分かった。歓迎交流会は友好的な雰囲気で開かれ、日本人との交流を深め、両国国民の温かい友情を感じた。そして、質疑応答は私の疑問を解消してくれた。

B-1　歩嵐 副団長（学校訪問）
学校訪問を通じ、学校の教育体制や、管理システム、授業の現状、そして教師と子どもたちの状況や多様な部活動を直に知ることができた。教師や児童生徒と直接に交流することができた。

B-4　何秀珍（学校訪問）
長崎市立朝日小学校を訪問した際、児童と一緒にゲームをした。自信に満ち、楽観的な子どもたちの姿、そして挫折を乗り越える力を見ることができた。子どもを尊重し、彼らの立場に立つという考え方、つまり子どもたちが何を求めているか、あるいは子どもたちに何をしてあげられるか、という視点を持つきっかけとなり、とても勉強になった。

B-7　金弋（学校訪問）
学校の水道はもともと蛇口から少量の水が流れるようになっており、大量の水が飛び散ることがない。浪費を防ぐために、石鹸は専用の袋に包まれていることがとても印象深かった。

B-12　格日楽図（学校訪問）
児童と一緒に昼食をとり、ゲームをし、彼らが幸せそうな学校生活を送っていることが分かった。生徒たちの勉強の負担はそれほど大きくなく、特にいい学校に進学したい児童生徒しか塾に通わないということも知った。

B-13　烏仁図亜（講義）
一番有意義なのは両国の教職員間の質疑応答だと思う。皆が挙げた質問はちょうど私も興味のある問題だった。

B-23　郭秀琴（学校訪問）
学校訪問を通じ、日本の学校のありのままの様子と教師や生徒の普段の生活を見ることができた。日本の生徒たちの逞しく、根性があり、謙虚な姿を間近に見た。生徒たちの明るい笑顔に心を打たれた。

C-1　鄭徳新 グループ長（学校訪問）
限られた時間の中で、日本の小中学校の実際の授業の様子、子どもたちの学ぶ様子や活動などを見ることができた。中国の今後の日本教育研究にこの貴重な経験を提供し、直接的に支援することができると思う。

C-4　丁震（学校訪問）
実際に授業見学や子どもたちの生活状況を見ることを通じ、日本の生徒の学業の負担や将来の夢などについて具体的な理解を得ることができた。

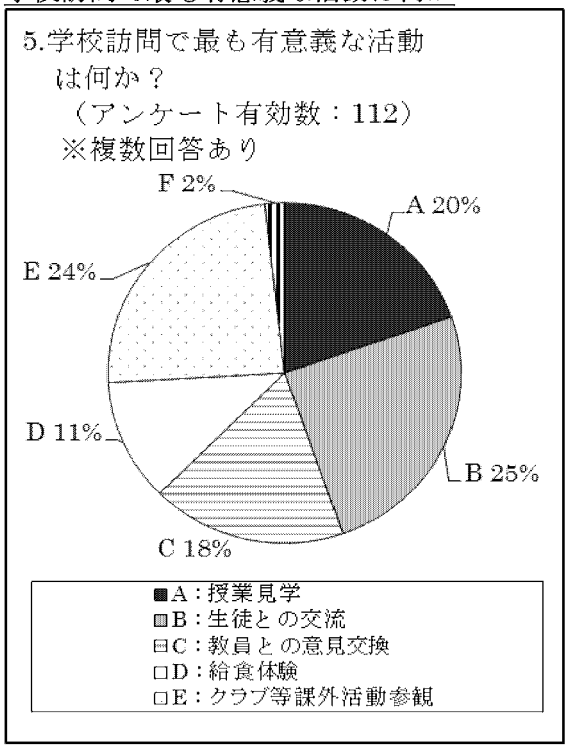
C-9　張歩力（学校訪問）
中国の一校長として、日本の学校に行ってみたかった。今回は 3 つの学校を訪問した。学校ごとに特色はあるが、どの学校も生徒の素質と能力の養成を重視し、楽しく学ばせる工夫、多彩な活動があった。生徒がきちんとした生活習慣を身に付けることも重視している。先進的な設備を持ってい

る。

C-11　黎江玲（学校訪問）
授業参観を通じ、少人数授業の良さが分かった。一対一の指導が行われ、より効果の高い教育ができる。生徒は部活動に参加する時間があり、自分の趣味などが見つけられ、生きることと成長することの楽しさを感じることができると思う。

C-12　李鼎盛（学校訪問）
日本の教育に対するより直接的、具体的な理解が得られた。特に子どもたちの生きる力と自律意識の養成について、日本の成果を肌で感じた。生徒の個性を尊重し、愛をもって教育を行う学校を作っていきたい。

◆質問５.
学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】＊原文は中国語

A-6　盧迎福（授業見学）
授業見学を通じ、義務教育の基盤である学校がどのように運営管理を行っているか、教師の授業の進め方、基礎能力の養い方、学力の高め方、課外活動の内容、研修制度について理解を深めた。

A-12　王淑萍 グループ長
（クラブ活動等の課外活動参観）
学校が児童生徒の生活や社会的実践などの面の教育を重視し、子どもたちも楽しく参加している。活動の内容が豊富で、しかも実効性が高い。

A-26　盧焱（教員との意見交換）
教員との意見交換を通じ、短い時間で自分が知りたい情報を素早く手に入れることができた。具体的な事例をたくさん知ることができた。

A-29　任希林（その他）
学校訪問の際に子どもたちから熱烈な歓迎を受けたことが一番印象深かった。
学校で子どもたちは無邪気な笑顔で私たちを歓迎し、両手を大きく振って歓迎の意を表す姿が深く印象に残った。同様のプログラムが中国で行われるとき、中国の児童生徒はどのような反応をするのか。日本の子どものように元気にあいさつできるのか。これは私たちが改めて考えてみるべきことかもしれない。

A-32　趙洪（授業見学）
授業見学を通じ、教師の教育方針について基本的な理解ができた。カリキュラムの設定なども学校の運営管理システムを反映していると思う。そして生徒の勉強内容についてもある程度分かった。ICT を効率的に活用することなども大変勉強になった。

B-7　金弋（給食体験）
ご飯を食べるときは子どもたちみんなが食べ切れるように頑張っている。牛乳パックはきちんと回収し、リサイクルをする。食べ終わったら、プレートを元の位置に戻すことなどがとても印象深かった。

B-24　劉君英（クラブ活動等の課外活動参観）
長崎市立桜馬場中学校で、和太鼓部とオーケストラ部の演奏を聴き、伝統文化の継承と、芸術的な薫陶が生徒に与える影響の大きさを感じた。

C-1　鄭徳新 グループ長（校長との交流）
教師の採用について知りたかった。少し紹介していただいたが、時間が限られていたため、具体的な役割分担などには触れられなかった。

C-2　劉飛（教員との意見交換）
教師として、教育理念および教育実践などについて同業の方々と交流ができ、お互いの経験を学び合えたことが大変有意義だった。

C-3　王東昇（クラブ活動等の課外活動参観）
小松市丸内中学校を訪問し、生徒の自律意識の高さと自主性に驚いた。クラブ活動等の課外活動が盛んで、掃除も真面目にする。生徒は皆礼儀正しく、情熱がある。学校教育は受験教育だけではなく、最も大切なのは逞しい体と人格の育成であることを改めて感じた。

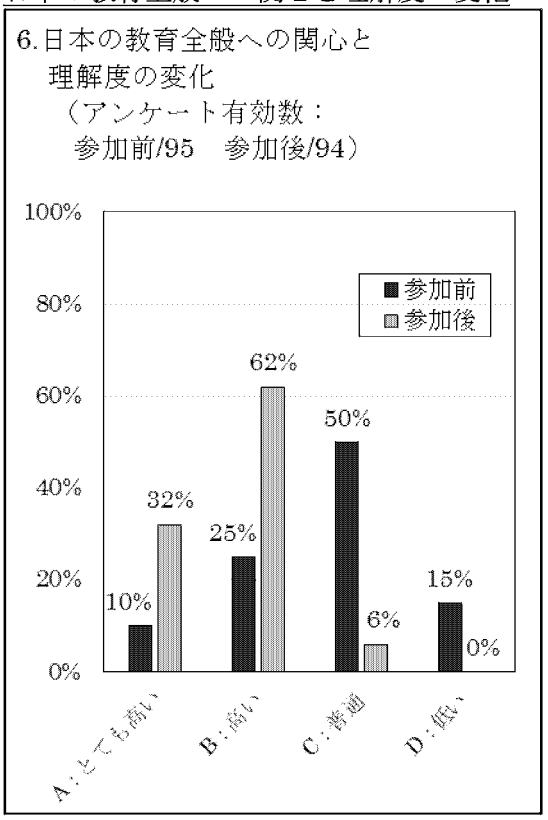
C-7　孫長瑜（教員との意見交換）
教員との交流を通じ、日本の教員の児童生徒に対する思いを感じることができた。いかに生徒の世界観や価値観を育てているかなども理解できた。

C-8　高平（生徒との交流）
生徒との交流の時間を持てたことで、勉強の現状、プレッシャー、モチベーション、夢について理解することができ、両国の生徒の相違点がはっきり分かった。
また、生徒との交流を通じ、中国の生徒の長所と短所を知ることができ、今後の仕事に生かせると思う。

C-9　張歩力（教員との意見交換）
良い学校になれるかどうかは学校の管理システムと教師の質次第だと思う。もしこの 2 つの要素が揃えば、良い学校になれるはずである。校長の私にとって、教師や校長の交流を通じ、この問題が解決できたことを嬉しく思っている。

C-11　黎江玲（給食体験）
給食体験を通じ、生徒の生活習慣の養成は日常的に徹底させなければならないということに気づいた。例えば、食べ物を無駄にしないことや食後の片付けなどを通じ、子どもを鍛えさせると同時に、職員の負担を減らしている。そして、給食は子どもの体に良いものを選び、栄養バランスが考えられている。子どもに対する工夫が見られる。

◆質問６.
日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（普通→とても高い）
参加する前は資料を調べ、初歩的な理解だった。参加後はその理解を更に深め、とても印象深かった。素晴らしい訪問であった。

A-7　潘一望（普通→とても高い）
以前は日本の教育のことをあまり知らず注目していなかった。今回のプログラムを通じ、日本の初等中等教育をより深く知ることができ、参考になるところがたくさんあった。例えば、学力の向上や、児童生徒の健康を重視することなどである。

A-12　王淑萍 グループ長（普通→高い）
参加する前は日本の教育の進んでいるところについて大まかな印象を持っていたが、参加してから実感として理解した。教育理念の面において確かに学ぶべき点や好事例があると改めて思った。

A-24　任艶萍（普通→高い）
来日前は情報を得る手段や方法は少なく、日本の教育に関する理解は非常に限られていた。興味もあまりなかった。
しかし、今回の訪問を通じ、日本の教育全般に関心が高まり、理解を深め、学ぶべき点や参考に値することに多く気づいた。

A-29　任希林（とても高い→普通）
来日前は日本が IT 技術の発展した国だと思っており、ICT を使って教育を行うなど義務教育面に膨大な投資をしているイメージがあった。実際には、日本教育における ICT の利用は想像ほど先進的ではなく、多くは黒板を使った伝統的な教育を行っていた。この点については、中国で先進的な ICT ばかりを追求している現状を見つめ直し、従来の黒板教育を貫くべきかどうかについて、もう一度検討すべきではないかと思う。教育の根幹を重視し、効率的な教育方法を探り出すべきである。

A-32　趙洪（低い→高い）
今回の活動を通じ、日本の教育への認識と理解を深めることができた。
いろいろなタイプの学校を訪問し、概要説明を受け、教室で授業見学をし、校長や教師と交流し、歓迎交流会に参加することなどを通じて認識を深めた。

B-1　歩嵐 副団長（高い→とても高い）
日中友好関係は悠久の歴史を有し、両国の文化の中にも共通している部分が多い。日中両国の教育はそれぞれの特徴、長所を持っている。両国はお互いに学び合い、相手国の長所を取り入れるべきではないか。そして、教育分野の交流と協力の推進は、日中両国の相互理解の促進と友好関係の発展にも繋がっていると考えている。

B-24　劉君英（低い→高い）
参加する前は、日本の教育への理解は新聞などに載せられた断片的な情報にとどまり、理性的な思考が欠けていた。
今回、日本の小中学校を訪問することができ、現地の教職員との交流で、日本の教育を具体的かつ深く理解できた。日本社会と日本の教育に対し理性的に考えるきっかけとなった。

B-25　楊富興（普通→高い）
2012 年に師範大学付属小学校の野球チームを率いて日本を訪問したことがある。その時に日本の教育概要と体育科については一定の知識を得た。今回、学校説明や交流を通じ、細かいところへの理解が深まったと思う。例えば、授業時間や、教師の任命制度、そして少子化の学校教育への影響などについて理解を深めた。

B-29　馮蔵璞（普通→とても高い）
これまでは遠くから眺めるだけだったが、今回は日本の教育現場で対面交流することができ、実際に活動に参加することによって、なじみ深く感じるようになった。相手の立場に立って考え直すきっかけとなり、理解も深まったと思う。

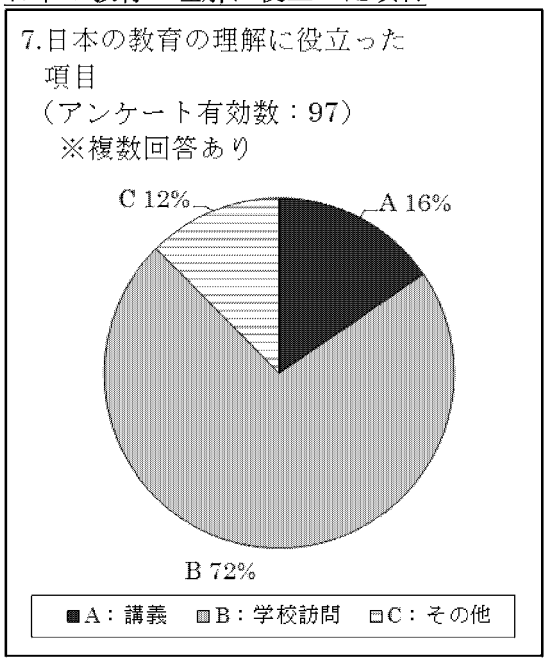
C-8　高平（普通→高い）
参加する前は日本の子どもたちが礼儀正しいということや、衛生面で良い習慣があるということなどを聞いただけであったが、実際に参加してみて、日本の子どもたちはゆったりと勉強できる環境で暮らし、自由で、個性を尊重され、集団意識が強く思いやりがあるとしみじみ感じた。

C-9　張歩力（低い→高い）
日本の一般の人は中国人と同じく平和志向で、友好的で、他人を尊重している。

C-17　李萍（高い→とても高い）
日中韓を含むアジアの大部分の国は教育を非常に重視し、進学のプレッシャーが大きく、生徒の負担が大きいと聞いたことがある。
今回の訪問を通じ、身を持って日本の初等中等教育の現場を体験することができ、

今まで聞いたこととは少し違う気がした。参考になる良い点がたくさんあった。

◆質問７.
日本の教育の理解に役立った項目



【主な意見】＊原文は中国語

A-2　陳会林 秘書長（講義）
講義は日本の教育概要の理解に必要な項目である。

A-7　潘一望（講義）
プログラム前半に講義を聞き、日本の初等中等教育制度と一部の教育政策を知り、その後の学校訪問で理解を深めるための基礎となった。

A-12　王淑萍 グループ長（学校訪問）
すべての日本の国公立小中学校はプールが備えていると聞いたことがある。水泳を学ぶことは、体を鍛えると同時に、生きるための技能を一つ習得することでもある。日本大学豊山中学校・高等学校で水泳の授業を見学し、生徒たちの逞しい姿と上手な水泳の動きを見て、その確かなスキルが深く印象に残った。

A-24　任艶萍（保護者との交流）
教育は学校教育だけで成り立つものではなく、家庭教育と保護者の協力が子どもたちの成長に不可欠かつ重要な役割を果たしているということがわかった。

A-29　任希林（学校訪問）
荒尾市の小学校では、ゲームなどを授業に取り入れることで児童を楽しく学ばせ、勉強への意欲を引き出していた。こうした授業で考える力と実践能力が養われ、児童を朗らかで思いやりのある人に育てることができると思う。

A-32　趙洪（講義）
内容が豊富で、さまざまな観点から日本の初等中等教育の現状を分かりやすく説明してくださった。

B-7　金弋（学校訪問）
壮麗な校門も、真新しい会議室や全天候型トラックもないが、全ての学校はプール、体育館、図書室、保健室などを備えている。しかもこれらの施設は有効に活用され、外見だけ立派な施設や用途のない施設はない。

B-13　烏仁図亜（学校訪問）
日本の小中学校の自主性を養う教育や、バラエティー豊かな課外活動が大変勉強になった。

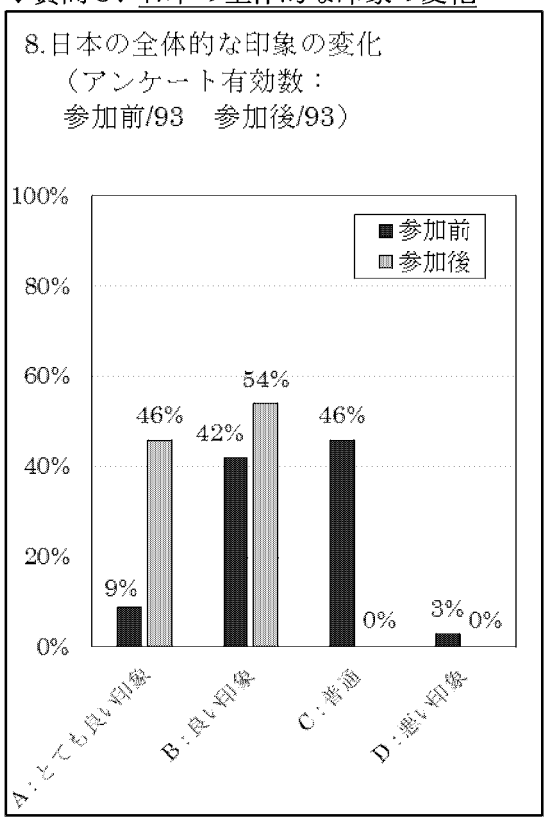
B-29　馮蔵璞（学校訪問）
自分が抱えていた疑問を日本の教師に直直接尋ねることができた。そして日中両国が共に直面している問題を発見し、また両国の違いも分かり、理解を深めることができた。

C-2　劉飛（講義、学校訪問、対面交流）
講義を通じ、日本の教育全体への理解を深めることができた。実際に学校に行き、対面交流と質疑応答を通じて、自分の興味のある問題についての理解を深めることができた。

C-9　張歩力（学校訪問）
学校訪問を通じ、間近に日本の教育現場を見させていただき、日本の教育の現状と

生徒の状況を理解できた。

◆質問８．日本の全体的な印象の変化



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（普通→とても良い印象）
国民の素質が高い。伝統文化の継承に力を入れている。ルールを守る。誠実で信頼関係を大事にする。

A-7　潘一望（普通→とても良い印象）
伝統文化の継承を教育に取り入れているのが良い。児童生徒の個性や能力に適した教育を行い、個性を尊重し、チームワーク意識を重視している。日本人はきちんと時間とルールを守る。学ぶに値することにたくさん気づいた。

A-8　馬元順（普通→良い印象）
参加する前は日本の文化や習慣については大した印象はなかった。参加してみると大変感銘を受けた。日本の教師や生徒はとても情熱的である。夕食後散歩に行った際に迷子になってしまい、生徒に道を聞いたら、ホテルまで一緒に案内してくれた。そのことに特に感動した。

A-12　王淑萍 グループ長
（普通→良い印象）
参加する前は、日本は経済発展しているがゆえに、日本人も傲慢で頑固なのではないかと思っていた。参加してからその印象が大きく変わった。日本人は礼儀正しく上品で、慎重で細やか、時間をきちんと守っている。そして日本の伝統文化がきちんと守られ、継承されていることにも気づいた。

A-24　任艶萍（普通→良い印象）
訪日前は民族感情や中国国内のネガティブな噂の影響を受け、日本に対する印象は良くなかった。今回の訪日で印象が良くなり、自分の体験や観察により、日本をより客観的に知ることができた。

B-1　歩嵐 副団長
（良い印象→とても良い印象）
日本の人びとはハイレベルの教養を持ち、プロ意識や職人意識が強い。特にサービス業の徹底した仕事ぶりはとても印象深かった。

B-7　金弋（良い印象→良い印象）
参加する前は日本に対する印象は漠然としていた。参加した後、謙虚さと心の強さは民族の真の成熟と繁栄の基礎であることに気づいた。日本人の謙虚さ、恭しさ、高い包容力と向学心を見習いたいと思う。

B-13　烏仁図亜（普通→とても良い印象）
実際に見た日本の教育は、地域社会、学校、家庭がうまく融合し、共に作り上げていく仕組みが素晴らしい。各学校の指導者や教師の親切なおもてなしに対し感謝している。

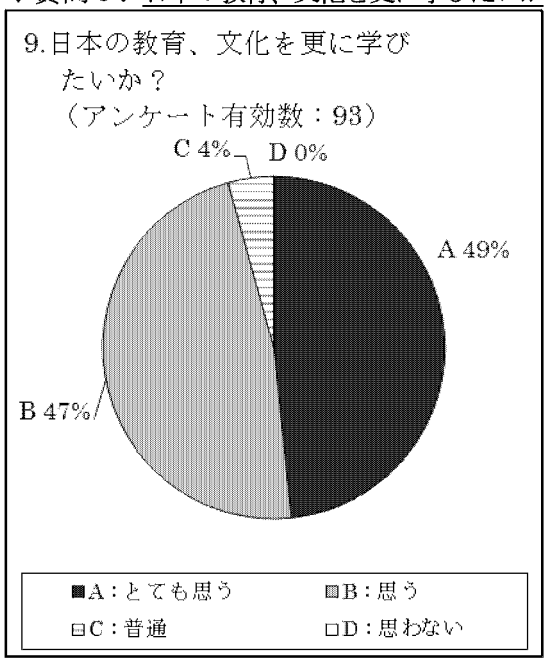
B-29　馮蔵璞（良い印象→とても良い印象）
日本人はもてなし上手で、ルールをきちんと守り、衛生習慣が良い。儒家思想の影響が今でも見られ、勉強になることがたくさんある。

C-8　高平（普通→良い印象）
参加する前は日本のことをよく知らなかった。参加してみて、日本がすごく綺麗な国であり、日本人は真面目で、集団意識が強く、もてなし上手で、礼儀正しいというイメージを持った。

C-15　趙萍（普通→良い印象）
東京滞在中に、同じグループの団員がうっかりしてタクシーに忘れ物をしてしまった。そのときの運転手がそれをホテルまで届けてくれた。小さな出来事だが、とても感動した。

C-33　趙艶（良い印象→良い印象）
来日前、日本人は皆礼儀正しく、ルールをきちんと守る人だと聞いていた。実際に体験してみて、本当だと思った。

◆質問９．日本の教育、文化を更に学びたいか



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（とても思う）
また日本を訪れ、もっと詳しく知りたいと思っている。

A-25　牛西運（思う）
教育文化の交流に注目し、日中文化交流を促進し、相互理解を深めていきたい。

A-26　盧焱（とても思う）
もし機会があれば日本の教育と文化に関する理解をさらに深め、そして勉強していきたい。比較し、学び、改善点を見出していきたい。

B-7　金弋（思う）
今後も日本の教育や文化についてもっと勉強したい。日本政府は教育への投資を重視している。障がいのある子ども一人ひとりに教育を受けさせ、普通学校と特別支援学校を選ぶことができる。また、普通学校でも特別支援学級を設けており、多くは知的障がいの生徒である。少数の生徒のためにクラスを開設することも普通のことである。こうしたことを知り、日本の教育と文化をもっと知りたいと思った。

B-22　郭立森 グループ長（思う）
日中両国の教育にはそれぞれの長所があり、お互いに学び合えればこそ、共にアジアをリードしていけると思う。

B-24　劉君英（思う）
日中文化交流に貢献していきたい。日本側にも訪問団を中国に派遣してほしい。

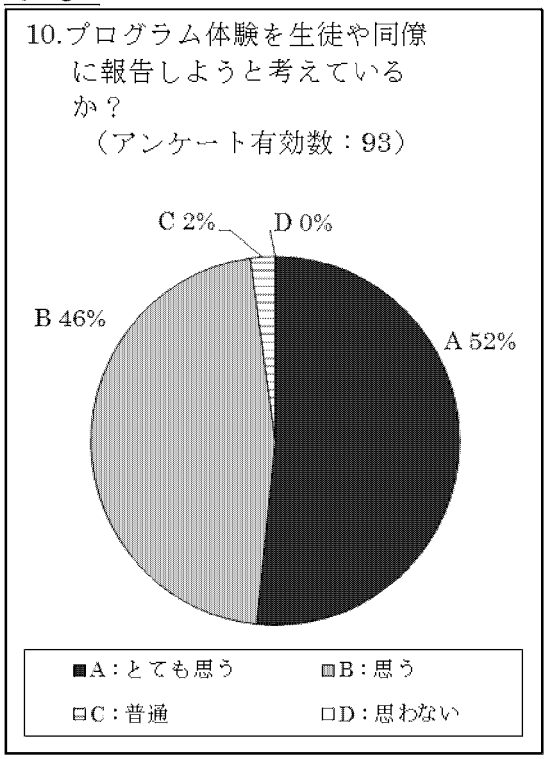
B-29　馮蔵璞（とても思う）
他民族の文化を真の意味で理解することはなかなか難しい。たくさん読み、たくさん聞きそして深く考えることがとても重要だと思う。日本人が持っているチームワークの精神、向上心、困難を乗り越える力、欠点を受入れる態度などに大変興味を持った。両国の教育や文化の比較研究が、両国の発展にも繋がると思う。

C-1　鄭徳新 グループ長（思う）
中国にとって、日本の教育は学ぶところが多い。中国の今の教育制度は先人たちが日本から学んだことを中国で実践してきたものである。今の日本のさまざまな教育方針、例えば、子どもたちの心身の健康や勉強以外の学校活動の重視なども大変参考になる。

C-9　張歩力（とても思う）
日本人はきちんと自分の考え方を持っており、しかも向上心がある。日本の教育のさらなる発展に期待すると同時に、これからも交流を一層強化していきたい。

C-17　李萍（とても思う）
日中両国は共にアジアの国で、同じ伝統や文化がたくさんあり、同じ人口大国である。何十年来の日本の教育改革は著しく発展し、大きな成果を遂げた。その経験がとても参考になると思う。

◆質問 10.
プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（とても思う）
必ず力を入れて広める。見てきたことを頑張って実践していきたい。

A-12　王淑萍 グループ長（思う）
今回の訪問の目的の一つは先進的な理念について学び、帰国後はなるべく早く今回の体験を上司や同僚や生徒に伝えることである。

A-24　任艶萍（思う）
日本の教育および日本文化に対する客観的かつ正しい認識ができたので、それをより多くの中国人、特に同僚や生徒に伝えたい。

A-26　盧焱（とても思う）
今回の訪問には明確な目標と任務があり、総括して報告することは不可欠である。
中国で訓練や指導の仕事をする立場にあるからである。

A-29　任希林（思う）
帰国後は学校の活動を通じ、今回の訪問の経験を同僚と生徒に紹介したい。日中両国の義務教育の教育方法の相違点を皆に紹介し、日本の、子どもたちを楽しく学ばせ元気に育てるという教育理念を皆に伝えたい。日本の教育理念と中国の一人ひとりの生徒に適切な教育を受けさせるというところは共通しているので、この点から両国の教育は本質として同じものがあるのではないかと思う。

A-32　趙洪（とても思う）
中国の教師と児童生徒にも日本の教育を知ってほしい。日本の先進的な教育理念を学び、日本の良い教育方法を皆に紹介したい。

B-1　歩嵐 副団長（とても思う）
今回の訪問を通じ、日本の小中学校の運営管理や児童生徒の日常の教育、生きる力の涵養、家庭教育などの面において、中国と似た部分が多いことに気づいた。同僚と意見を交わす中で、自分の考えがよりまとまっていくと思う。

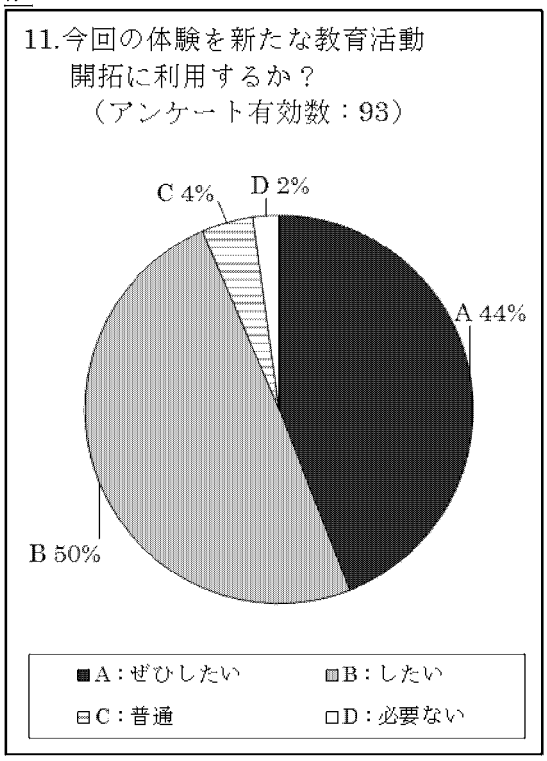
B-7　金弋（思う）
帰国後は今回の体験を学校に報告し、同僚や児童にも伝えたい。日本の教師と児童の日常の交流、とりわけ授業中の様子から、教師の児童に対する愛と強い責任感を感じた。段階を踏んでうまく指導するという教育方法は芸術的とも言えるほどで、教育に精通している教師としての品格を感じた。

B-13　烏仁図亜（とても思う）
学校の綿密な管理システムはレベルが高いと感じたので、帰国後は日本の先進的な管理体系を皆に紹介したい。

B-24　劉君英（思う）
両国の文化や学校の運営方法には違いがあるが、教育理念や考え方には似たようなところが多い。こういったことは周りの同僚からも関心が寄せられている。

C-2　劉飛（とても思う）
今回のプログラムを通じて日本の初等中等教育から学んだことはたくさんあったが、とりわけ日本の教師の実質面を追求する姿、慎重な態度、そして焦らずに仕事をする姿勢が大変勉強になった。できるだけ早く同僚と分かち合いたい。

◆質問 11.
今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【主な意見】＊原文は中国語

A-7　潘一望（ぜひしたい）
日本の義務教育において、児童生徒の自立能力や生きる力を育む教育はとても具体的で、実践性が高い。今後は自分の学校でもこういう教育を強化していきたい。

A-12　王淑萍 グループ長（したい）
教育行政部門の仕事をしているので、今回の日本の教育現場で見たことや体験したことを管轄の学校に紹介し、アドバイスしたいと思っている。

A-26　盧焱（ぜひしたい）
ゲームを授業に取り入れ、楽しく学ばせる手法を、自分の授業にも取り入れたいと思っている。
生徒が学習レポートを書くことによって、論理的に問題を解決する方法を生徒に教え、その能力を養うことにもつながっている。この点は特に学ぶべきだと思う。

A-32　趙洪（ぜひしたい）
①考える力を重視した教育を行う。ゲームを授業に取り入れ、生徒の学習に対する意欲を高めていきたい。
②グループワークや体験学習などで学力や自主性の向上を目指す。
③月ごとにテーマを決めて活動し、生徒の団結力と協力意識を高める。
④長期休暇を利用し、修学旅行を行う。

B-1　歩嵐 副団長（ぜひしたい）
①日本の小中学校の家庭科を中国の授業科目に加えたい。
②家庭と学校と地域の連携、特に PTA の役割が印象深かったので、中国でも取り入れたい。
③児童生徒が自己管理能力を養うことを重視していきたい。

B-7　金弋（したい）
今回の活動を通じ、現場で見たことや体験したことを自分の今後の実践に生かしたり、新しい教育活動を展開するあたり活用したりしたいと思っている。
日本の学校教育は教育の本質を追求し、目に見える成果だけを求めたり、いつも何かに追われるような焦燥感を持たせたりしない。教師や生徒を一律の基準で評価するのではなく、努力したかどうかに評価の重

点を置く。少人数教育を行い、一人ひとりの子どもの心身の成長にきちんと目を向けている。

B-13　烏仁図亜（ぜひしたい）
生徒の生きる力や小さい頃からの生活習慣を身につける教育や、特別支援教育の方法、そして、家庭教育や自ら学ぶという意味の第三教育などについても、これからの仕事で活用していきたい。

B-24　劉君英（ぜひしたい）
環境教育、ルール意識の習得などについては今後の教育の中で強化していきたい。
芸術教育は児童生徒に深い影響を与えるということも、日本の経験から啓発を受けた。帰国後は力を入れて実現させたい。

B-29　馮蔵璞（ぜひしたい）
長崎市の「あじさいスタンダード」の中のカリキュラム実施基準を自分の学校の教育指導改革に取り入れ、指導目標の実現につなげていくつもりである。

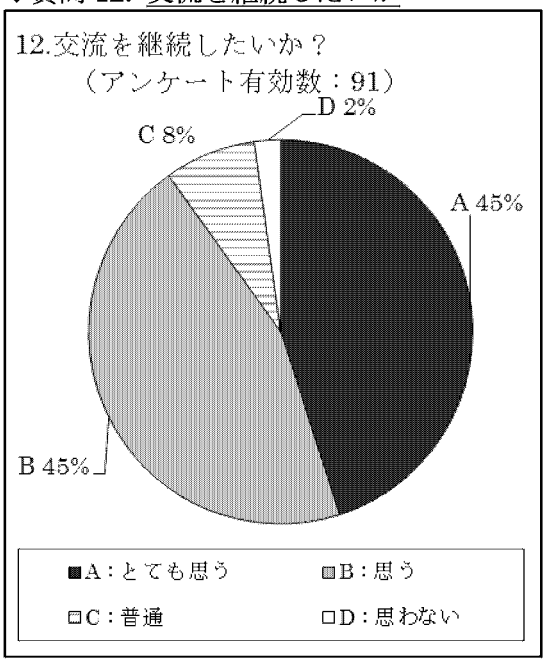
C-2　劉飛（ぜひしたい）
教育交流事業に携わっている者として、日本の教育関係者との交流を深め、より多くの日中間の教育協力プロジェクトを促進したい。より多くの中国教職員に日本の教育の趨勢を知り、理解してもらいたい。同時に、日本の教職員にも中国の教育をもっと知ってもらいたい。日中両国の子どもたちにより良い教育を受けさせるチャンスを設け、より良い教育環境を提供していきたい。

C-8　高平（ぜひしたい）
自分の生徒にも日本の生徒のような思いやりの心を学んでもらいたい。また、チームワーク意識の向上、個性の尊重、積極的に体を動かすこと、礼儀などについても教えたい。

C-9　張歩力（ぜひしたい）
生徒の課外活動、生活習慣の養成、学校の運営管理について大変勉強になった。これからの自分の職場でも活用できればと思う。

C-17　李萍（したい）
中国では立場上直接授業をすることはないが、機会があれば、他の教師に紹介したい。例えば、職業体験学習を強化することや、生活能力に関する教育を課程に加えることなど。

◆質問 12. 交流を継続したいか



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（とても思う）
微力ながら、力を尽くして荒尾市の学校との交流を続け、生徒や教師の相互訪問を促進する。
ACCU が実施・運営する中国政府日本教職員派遣プログラムの受入れ側として参加したい。

A-4　李向栄（思う）
今後交流を継続する際には、期間を延長してほしい。じっくりと 1 つの学校を見学したい。学校の授業をもっと聞きたい。初等中等教育の教育研究活動に参加して、幅広い教職員と交流したい。

A-7　潘一望（とても思う）
引き続きこのような交流活動を継続し、さらに強化していきたい。ACCU を通じ、

両国の学校が友好協力関係を結び、定期的に訪問することができれば幸いである。

A-24　任艶萍（思う）
訪問した学校と教職員間の交流をさらに深め、具体的な交流に発展させたい。例えば、通訳を手配し、授業の進め方などについて話し合い、お互いの生徒に対し体験授業を行い、授業参観をするなど。

A-26　盧焱（とても思う）
②次はまるまる１時間授業参観ができればと思う。いくつかの学級の異なる授業を用意し、各自の状況に応じて参観する授業が選べるとより良い。
②日本の教職員とともに授業研究活動を行いたい。あるテーマに沿って深く議論したい。

B-1　歩嵐 副団長（とても思う）
交流協力のプラットフォームを設けていきたい。例えば、研修旅行や教職員訪問など。

B-7　金弋（思う）
今後とも今回訪問した学校、教職員との交流を深めていきたいと思っている。
1 つはメールを通じて相手の学校と教育理念などを共有していくこと、もう 1 つは日本の学校の管理職と教師を自分の学校に招き、我が校の運営管理や教育についての意見やアドバイスを伺い、双方が共に発展していくことを願っている。

B-22　郭立森 グループ長（とても思う）
訪問した学校や行政機関と友好関係を結び、交流を続けたい。

B-24　劉君英（思う）
今の交流の形や内容はとてもよく、多くの収穫があった。今後もし機会があれば、ぜひ同僚たちにももっとこういう活動に参加してもらいたい。
スポーツの友好試合や、書道交流、芸術分野の展示や発表会など、多方面からより多くの人がより深い交流をできるプログラムも行ってほしい。

B-29　馮蔵璞（とても思う）
両国の教職員が相互訪問し、可能であればホームステイを通じて相手国の生活と文化を体験できればと思う。
教職員同士の交流のときは、事前にテーマを設定し、それに関する問題について交流し、議論を深めればよりよくなるのではないかと思う。

C-1　鄭徳新 グループ長（思う）
メールを通じ、教育行政機関の管理職の方と連絡を取りたいと思っている。

C-2　劉飛（とても思う）
日中両国の教職員に両国の教育がともに直面している問題について深く議論する機会を設け、ゼミナールとかシンポジウムなどの形で自分の考えや研究成果を発表するのもいいのではないかと思う。

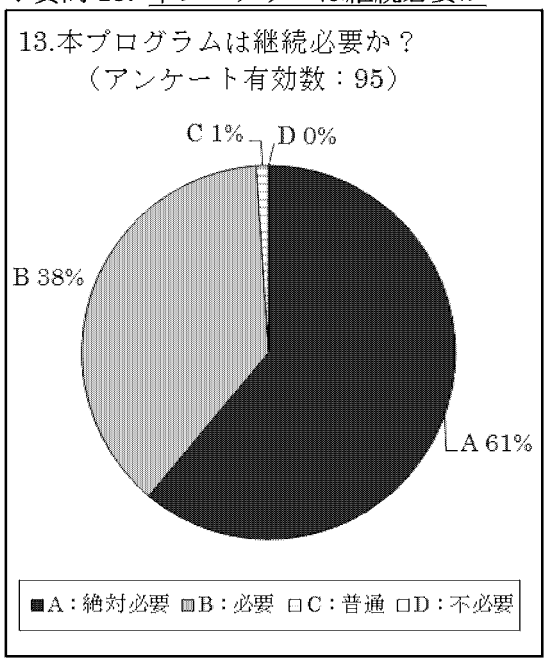
C-9　張歩力（とても思う）
日本の学校の校長との交流を深めたいと思っている。今回は校長との交流時間が少なかったので、十分な交流ができなかった。また、もし今後機会があれば、中国の生徒にも日本を見てまわるチャンスをいただければ、相互理解と友情の深まりにもつながるのではないかと思う。

C-13　舒清芳（思う）
日本の教職員と電話やメールを使って英語で交流したい。意見交換や実務経験の共有をしたい。

C-17　李萍（思う）
もし可能であれば、両国の生徒と教師の一定期間の交流プロジェクトをやってほしい。例えば、生徒の半年間の交換留学や教師の 1～3 ヶ月の交流プロジェクトがあれば良いと思う。

C-31　翟麗光（思う）
日中の長期的な学校間交流を続けたい。実現するためには、メールでの継続的な連絡、ホームステイ、年に１回程度の学校訪問などの活動が必要だと考える。

◆質問 13. 本プログラムは継続必要か



【主な意見】＊原文は中国語

A-1　趙海峰 団長（絶対必要）
これからもっと力を入れるべきである。

A-7　潘一望（絶対必要）
絶対必要だと思う。交流があるからこそ、お互いに向上していける。

A-12　王淑萍 グループ長（必要）
必要だと思う。団員は日本に来て、一人ひとり何かしらの収穫を得、それぞれ学ぶべきところや参考にできるところを見つけられると信じている。

A-29　任希林（絶対必要）
このような大変有意義な活動は継続すべきだと思う。両国の相互理解と信頼を一層強化し、お互いに学び合える場を設けていただきたい。
今回の滞在中は我々選ばれた団員が日本社会と触れ合い、日本の教育行政機関や学校の教職員、生徒と直に接し、交流ができ、相互理解を深めることができた。日本の人びととまるで家族のような、兄弟のような絆を結んだと思う。

B-1　歩嵐 副団長（絶対必要）
日中双方の教育分野における交流と協力を促進できるから。

B-7　金弋（必要）
このプログラムを通じ、他国の教育理念やこれからの教育の方向性、貴重な学校管理の実例などを学ぶことができたので、継続すべきである。

B-13　烏仁図亜（絶対必要）
これからの平和共存のためにこのプログラムを絶対継続してほしい。

B-24　劉君英（必要）
交流を通じ理解を深め、そして友情が生まれる。今回の交流を通じ、視野を広げ、貴重な体験をさせてもらった。

B-29　馮蔵璞（絶対必要）
相互訪問があればこそ、交流ができ、お互いの国の文化を理解できるようになると思う。このような活動が両国の友好の架け橋となる。このような機会をいただき、感謝している。

C-2　劉飛（絶対必要）
本プログラムを通じ、中国教職員の日本教育に対する理解を深めることができ、日中双方の教育交流を促進し、相互理解を深め、お互いに学び合うことができた。日中両国の教育事業の発展をともに推し進めることができ、大変有意義な活動だと思う。

C-9　張歩力（絶対必要）
日中両国が根本的に目指すものは同じである。交流の範囲を拡大し、交流を促進することが必要であり、日中友好のためにも重要なことである。日中両国の未来のために、このような活動をもっと増やしてほしい。

B-31　徐永輝（必要）
①学校の交流を続け、互いに足りない部分を補い合い、助け合うことによって、両国の教育の発展を促進できるから。
②両国間の相互訪問によって、民間レベルの友情を育むことができるから。

◆質問 14. その他気づいた点

【主な意見】＊原文は中国語

A-7　潘一望
どこを見ても綺麗で、ゴミ分別などの環境保護意識を国民の誰もが持っている。

A-12　王淑萍 グループ長
お互い知らない日本人の間でもいつも笑顔で譲り合って、相手に気を配っている。

A-13　莫迎春
小学 1 年生が床に伏せて雑巾がけをする様子に感動した。

A-25　牛西運
日本では皆交通ルールを守っている。

A-26　盧焱
交差点で車両は必ず減速し、歩行者に道を譲ることと、荒尾では民家の庭が緻密にデザインされていることに気づいた。

A-2　範勇
日本の教育の歴史文化への関心の高さに気付いた。国民は総じて伝統文化を重視し、尊重している。文化水準が高いと思う。

B-7　金弋
日本は島国で、自然資源が豊富でないので、政府と国民の節約の意識や環境保護の意識が非常に強い。ものを粗末にせず、十分に利用することは小さい頃から教えられた理念だそうだ。

B-22　郭立森 グループ長
文部科学省は研究を重視し、研究を通じて指導要領を改善している。

B-25　楊富興
寒い中、生徒たちがわざわざ見送ってくれて大変ありがたかった。風邪気味の生徒もいたようなので、大事にしてほしいと思った。

B-29　馮蔵璞
①日本の少子高齢化問題の深刻さに驚いた。30 年間で生徒数が三分の一まで減り、労働力が不足し、高齢者の福祉問題が深刻になった。
②日本の職員室が狭いと感じた。

C-8　高平
日本の生徒はリラックスして授業を受けており、教師の許可をもらって図書館に資料を調べに行ける。

C-14　蒋大橋
日本の教育は子どもの健康を非常に重視している。メガネをかけている子がほとんどいなかったので、近視の子どもも少ないと思う。

C-17　李萍
日本の学校給食は質素ではあるが、栄養バランスが良く、健康的である。量も適切で、たぶんこれも日本で肥満の生徒が少ない理由の 1 つではないかと思った。生徒はご飯を食べるときも集中している。だらだら食べず、良い食習慣を持っている。

C-33　趙艶
日本はとても安全な国で、日本人は公共の場所では大声を出さない。礼儀正しい。

2. 受入れ教育委員会

A グループ

●荒尾市教育委員会
指導主事　上原　泰

プログラムの全体的な印象

- 今回、33 名の中国教職員の方々を迎え入れたが、皆さんとても友好的で礼儀正しく、学校訪問や施設見学などスムーズに進めることができた。
- 初日の「歓迎交流会」では、一緒に歌（「北国の春」）を歌ったり、全員で「炭坑節」を踊ったり、友好的な雰囲気の中で交流を深めることができた。各テーブルでは、通訳ボランティアの協力で情報交換も進み、互いの国や学校のこと、習慣等についても知ることができた。
- 見学先では、「宮崎兄弟生家施設」において、孫文と宮崎滔天とのつながりなど、担当者の説明にも熱心に耳を傾けていただき、中国と荒尾市とのつながりを知っていただくことができ、日中両国の友好と相互理解につながるものと感じた。その他の施設見学では、同じ施設を見学しても、その年に訪問される先生方によって反応が違うことを感じた。
- 学校訪問では、笑顔で児童生徒と交流される姿が印象的であった。国は違っても、教育に携わる立場にあり、子ども達に向ける眼差しは温かいと感じた。また、中国の先生方から日本の子ども達は「元気（体力）がある」「行儀がよい」などの言葉を聞くことができた。

プログラム成果

- 各学校の訪問では、中国の先生方から積極的に質問いただいた。学校からも詳しい説明があり、日中の教育の違いやそれぞれの課題について共有することができた。
- 市内の施設見学を通して、日本の伝統文化や産業、中国との深いつながりについて知っていただくことができ、日中友好、相互理解につながった。
- 各学校の訪問で、授業の様子を見てもらうだけでなく、児童生徒と直接触れ合う交流の時間を持つことができ、子どもたちにとって国際交流を肌で感じる貴重な機会となった。

B グループ

●長崎市教育委員会
指導主事　久松　千樹

プログラム成果

- 桜馬場中学校、淵中学校、朝日小学校ともに、2 回目ないし 3 回目の訪問校ということもあり、それぞれの学校で、国際交流に対する独自のノウハウができた。今後、各学校がこの規模の国際交流を行う上で、いいモデルになったと信じている。また、同様に、教育委員会も平成 25 年から 27 年の 3 年間で、受け入れのノウハウはもちろん、中国の方々の考えや思いを通して、人としての対応を体感することで、要領だけではなく、思いの共有がどれだけ大切かということを学ぶことができた。
- 福岡の閉会式で、グループ長が長崎市のことをほめてくれたり、私が少し紹介した相撲時のジェスチャーをみんなで披露してくれたりしたことがぐっと胸に染み込んだ。バスを見送りする時には、自然に目頭が熱くなったことを今でも覚えている。

加えるとよいと思われる活動

- 日程の都合上、仕方ないとは思うが、ホームビジットは中国教職員の方々にとってはやはり草の根交流を深めるという意味では、大切だと感じた。事務作業量は増えるが、わざわざ訪日されることを考えると、

おもてなしをしなくてはと思う部分も多分にある。

プログラム改善に向けた助言

- 日程（何月何日から何月何日）の提示については、早めであればあるほど、学校現場はありがたいと思う。

C グループ

●小松市教育委員会
指導主事　東口　幸央

プログラムの全体的な印象

- どの訪問場所でも，訪問団の方々は熱心に質問され，意欲的に学ぼうという姿勢が感じられた。
- 管理職の方や行政の方が多かったためか，質問が教育行政に関すること，学校運営に関する質問が多かったと思った。
- こちらから，質問する機会もあればよかったと思った。

プログラム成果

- 小松市の教育や学校生活について日本側から中国側に伝える機会や教職員との交流の機会をもてたことで、両者間の理解が深まり国際交流が進んだと感じている
- 中学校や高校で、中国の教職員と生徒の交流の機会をもてたことで、国際理解も進んだと思う。

苦労した点

- 今回は，外国語（英語）ができる方が少なく，互いのコミュニケーションを図ることに苦労した。

加えるとよいと思われる活動

- 丸内中学校で中国の方に授業をしていただいたのはよかったと思った。このような交流がクラス毎の小集団で行うことができると、多くの生徒が中国の教職員と交流が深められたと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 事前に訪問者から質問したい視点が分かると、受け入れ側も準備ができると思う。

3. 受入れ校

A グループ

●日本大学豊山中学校・高等学校
広報主任　田中　正勝

プログラムの全体的な印象

- 来日直後の来校ということもあり、まだ緊張された様子であった。しかしながら、時が経つにつれて、質問や見学が積極的に行われていた。生徒たちの学校生活の様子や施設の運用、生徒指導など多岐にわたる質問があった。中国の先生方のご来校は今回で 3 回目になるが、かつてと比べると教員としての感覚的な面で共通理解を得る場面も多々見受けられた。

プログラム成果

- 先生方の情報交換のみならず、生徒たちや保護者の皆さんにも出席いただいたことにより、様々な面で刺激を受けた。特に校内見学や授業参観、昼食交流などの場面で、生徒たちはコミュニケーションを楽しんでいたようである。事後、案内役の生徒からは、次年度以降はもっと生徒主導で運営に当たりたいとの申し入れもあった。

苦労した点

- 久しぶりのプログラム運営ということもあり、再確認事項が多く内部調整に時間を費やした。

加えるとよいと思われる活動

- 文化交流や地域交流など学校を取り巻く環境を知ってもらうもの良いかと思う。教育機関や教育制度のみの情報交換では、真の教育は理解できないと私たちは考えるからである。そのためにも、学校を出たところでのプログラム実現もあり得るかと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 主催校（受入れ校）が増えることを期待する。このためには受入れ校の多様化のために説明会を実施されてみてはどうか。実際の受入れ校の先生方が説明会に出席、説明することで受け入れ検討校の不安も解消されるかと思う。素晴らしいプログラムを共有するための一つの方法としてご検討いただきたい。

●荒尾市立荒尾第四中学校
教諭　早野　直美

プログラムの全体的な印象

- 中国からの訪問団の先生方は、とても友好的な印象だった。家庭科授業を観ていただいたが、中国には技術家庭科の教科がないため、とても熱心に質問されていた。1 年生の国語（書道）の授業で、実際に中国の先生が書いて見せてくださり感激した。また、交流会に参加した生徒一人ひとりにお土産を手渡しでいただき、「謝謝」「ありがとう」という言葉を交わすことができた。

プログラム成果

- 来校された先生方の笑顔やお話、交流会によって中国へのイメージは訪問受入れ前より良くなったと思う。また、受入れにあたり、あいさつ程度の中国語を学ぶ機会が持て、隣国に対する興味や関心も高まった。

苦労した点

- 交流会では、日本の教育に対してたくさんの質問があったが、事前に質問内容がわかっていれば、もう少し的確なお答えができたかもしれな

い。

- また、通訳の人数が少ないため、交流できる人数に限りがあった。

加えるとよいと思われる活動

- 受入れ校としては、見ていただくだけでなく、中国のことを知る・学ぶ時間の確保をもう少しすべきだったと思う。簡単な中国語講座や文化講座が事前にあると、出迎える生徒たちの歓迎ムードも高まると思う。

●荒尾市立中央小学校
教諭　田中　邦章

プログラムの全体的な印象

- 昨年度に引き続きの訪問だったので、戸惑うことなく迎え入れることができた。いろいろなお土産等をいただき、恐縮した。

プログラム成果

- 中国の先生が、中国語で話されることを通訳の方を通じて聞くことは、子どもたちも私たち職員も一番興味深く感じた。ニュース等で見たり聞いたりすることよりも直接に交流の体験を持つことで、お互いに本当の姿を知ることができたように思う。

加えるとよいと思われる活動

- 教員同士で意見を交換する時間などを設けることもよいのではないかと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 教員だけでなく、子どもたち同士の交流（テレビ電話等でもよいので…）が少しでもできるとよいのではないかと思う。

●荒尾市立万田小学校
教諭　古閑　悦子

プログラムの全体的な印象

- 授業参観時、中国の先生方が熱心に見たり聞いたりしている姿が印象的だった。
- 児童の歌や活動を笑顔で参観したり一緒に活動に参加したりしている姿に、子どもを大切に思っていることを感じた。

プログラム成果

- プレゼント作りで折り紙の作品に取り組んだが、児童が集中して作ったり作品が作れるようになったり、活躍する児童が増えたりするなど、児童にとってもよい成果をもたらした。
- 初めて中国の方々と接したり文化に触れたりする機会が持てたことで、中国という国に興味を持つことができた。中には、図書室で中国に関する本を借りる児童もいた。
- 質疑や意見交流会では、私たち教職員にとっても、中国の先生方がどんなところに興味があるのか分かった。

苦労した点

- ステージ発表の時間配分が難しかった。特に児童発表に関しては通訳が入ると時間もかかり、児童にとっても難しいことだと感じたので、事前に中国語の翻訳をお願いした。
- 予算内で、喜んでいただけるプレゼントは何か、悩んだ。

加えるとよいと思われる活動

- 昨年まではホームビジットがあった。これも、実際に家庭に入って様子が分かるという点ではいいのかと思った。

プログラム改善に向けた助言

- どこまで、準備しておかなければいけないのか（座席の配置など）、資料の用意など、具体的に教えていただけると助かる。
- 中国の先生方のニーズを具体的に教えていただけると助かる。

B グループ

●市川学園　市川中学校・高等学校
副校長　及川　秀二

プログラムの全体的な印象

- 定期的に海外の先生方にご来校いただくことは、本校の教職員・生徒にとって大きな刺激になっている。今回は中国語の模擬授業やシンポジウムなどでの交流が印象的だった。また、中国の先生方の発言内容が、我が国と同様に「詰め込み型から自発型へ」「教養重視」「国際理解教育」に変化している事が印象に残っている。

プログラム成果

- 本校では海外来校者に対して、その国の言葉を話せる生徒を中心とする「学園アンバサダー」を帯同させている。今回も、歓送迎や昼食等の場で活躍した。日頃、自分の特技を発揮する場が少ない彼らにとって有意義な時間となった。

プログラム改善に向けた助言

- これまでは午前中の来校で時間的な制約が多かったのだが、今回は午後なので余裕を持ったスケジュールとなり、クラブ活動の見学も含め生徒との交流時間を多くとれた。今後もこの日程が良いと思う。

●長崎市朝日小学校
校長　元田　美智子

プログラムの全体的な印象

- 日本の学校のマナーに合わせようとしてくれている印象だった。中国教職員の訪問団の方々のマナーは良かったように感じたが、授業中や交流会の最中に一部児童におみやげやお菓子を渡すことについては教育的配慮にかけることではないかと思う。（もらえなかった児童への配慮）
- 中国の方の子どもへの接し方がとても優しく、とても好感が持てた。体育館でのじゃんけんゲームの様子からそう感じた。また、交流給食でも優しく語りかける先生方が多く見られた。チャレンジタイムは、大変良いアイディアだったと思う。参加型の交流は、中国の方の様子も子どもたちの様子も楽しさがはっきりとわかった。じゃんけんゲームも、近い距離での交流はとてもいいアイディアだと思った。全体交流会が、学年の出し物をなくしたことですっきりし、時間に余裕ができた。チャレンジタイム・じゃんけんをすることで、子どもとの距離が縮まり、表情が大変よくなった。帰り際に何人もの先生から「謝謝！」と笑顔で言われた。
- 授業、教育課程等に興味があり、授業中に質問する場面があったが、授業参観後に質問の時間をとった方がよいかもしれないと思った。授業中に話しかけられることがあり、子どもたちの集中力が欠けているように感じた。

プログラム成果

- 中国語がわからない子どもたちが、通訳の方を活用しながらコミュニケーションを図ろうとする様子が見られ、普段の外国語活動の学習が生かされつつあったように思う。そ

の点を確かめることができたことも一つの成果だった。

- 子どもたちが笑顔で楽しむことができたこと。「交流なくして友好なし！」　子どもたちの自然なコミュニケーション力に感心させられた。
- 子どもたちは英語で会話が通じず、普段接する機会がほとんどない中国の方との会話に悪戦苦闘していた。しかし、身振り手振りのジェスチャーや顔の表情でコミュニケーションを図ろうとする姿がみられ、貴重な体験になったのではないかと思う。
- 通訳ボランティアさんがいたこともあり、とくに給食時にはコミュニケーションが取りやすかった。子どもたちもどうにかしてコミュニケーションをとろうとする様子が見られた。

苦労した点

- 全ての先生が力を合わせて成功できた会だと思う。
- 大変な部分はいろいろとあると思うが、少ない職員数で助け合い、それぞれが力を出し切って、毎回成し遂げる朝日小のすばらしさを感じる。
- インフルエンザ等で児童や教員が体調を崩しやすいこの時期の実施は難しい面があると感じた。
- 自分自身が通訳の方を活用することができなかったので、学級に1人のボランティア通訳の方をきちんと活用すべきだったと思う。

加えるとよいと思われる活動

- 今のままでは一方的な交流となっているので、中国のことについてのプレゼンテーションのようなものがあれば、「国際交流」となると思う。
- 図書室で訪問団の方々への学校説明はあったが、朝日小学校の子どもたちが「中国はどんなところか？」を具体的に知る機会が少ないと思う（本校職員の掲示物などで知る程度）。あいさつの中で若干の説明はあったが、映像などを使ってお話をいただくと子どもたちも得るものが大きいと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 「国際交流」という名目であるならば、長崎市内のいろんな学校を対象とすべきだと思う。
- 中国の先生方が図書室から移動する時貴重品は所持していただいたが、他の荷物は残っていた。今回は添乗員さんが図書室に残ってくださり助かった。
- 給食交流の際に、「他の学校でもこのような交流はしているのか」と質問があった。どのような学校運営をしているのか気にされていたので、いろいろな学校を訪問した方がよいと感じた。給食では、冷たい牛乳を飲む習慣があまりないらしく、ほとんどの方が残されていました。また、魚（いわし）のフライも苦手で残していた人もいたので、日本の給食を食べるのもメニュー次第ではきびしいところもあるのかと思った。
- 日本の子どもたちがどのような給食を食べているのかも視察の一環だと思ったが、寒い時期に冷たい牛乳、何の食材が使われているかわからない不安もあったと思う（いわしのフライがわからなかった）。給食室の準備なども含めて毎年大変なので、給食は見直してもよいのではないかと思う（楽しそうに給食を食べておられるようには思えなかった）。

●長崎市立淵中学校
教頭　岩永 聡輔

プログラムの全体的な印象

- 準備物について、今回は昨年度の受

入れ経験が有り、かつ今年度中国を訪問した教員もおり、そこまでの苦労はなかったが、かなりの気を遣うと思う。また、訪問者全員へのお土産は準備できなかったが、教育課程を消化しながらその準備をするのは、やはり難しいと思う。

プログラム成果

- 中国の教育事情を直接聞くことができ、参考になった。生徒も他国からの訪問は刺激となった。

苦労した点

- 今回、意見交換会の司会を受入れ校で行ったが、もっと慣れているACCU 又は教育委員会で受け持っていただいた方が、討議が深まるのではないかと、司会・進行をしながら感じた。

加えるとよいと思われる活動

- 1 校で交流をするのではなく、長崎市内各校から集まったグループで意見交換をするのも良い方法ではないだろうか。

●長崎市立桜馬場中学校
主幹教諭　田嶋　修

プログラムの全体的な印象

- 合理的な視点を持った質問が多かったように感じた。特に公立高校の入試において定員割れをしている学校を、存続させている必要があるのかという意見を持っていた。また、学校の予算面についても興味を持っているようであった。
- 中国の教育にもトレンドがあり、よい取組みなどは政府が急速に進めようとして現場が混乱することもあるという本音も見えた。

プログラム成果

- 長崎市独自の取組みとして、広東省中山市との交流を行っている。本校も現地の中学校との交流を始めたばかりである。今回のプログラムを受けるにあたり、校内研修を実施し、中国の基礎教育について研修を行った。
- 実際の交流を通して教員も生徒も隣国をより身近に感じる機会を得た。また、交流事情が進展しているということを肌で感じることができた。今後の交流を進めるにあたり、ノウハウの蓄積にもなった。

苦労した点

- 滞在時間が限られており、どうしても分刻みのスケジュールとなった。受入れ側に余裕がなかった。訪問の人数が多く、十分な対応ができなかった。本校の規模では、多くても 20 名前後が望ましいと考える。

加えるとよいと思われる活動

- 学校外でもよいので、両国の教職員が交流できるような会合があるとよいと思う。多くの日本の教員にも、互いの国の教育現場の情報交換ができる機会を増やしてほしい。

プログラム改善に向けた助言

- 今後も日本と諸外国の教職員との交流が、ますます発展することを期待している。国際交流は民間交流や草の根交流が基本である。本校も微力ながら、広東省中山市との交流を深め温めていきたいと考えている。

C グループ

●立教池袋中学校・高等学校
広報室長　初瀬川　正志

プログラムの全体的な印象

- 今回初めて訪問団を受け入れたが、訪れた方々の熱心さと、関係者の熱意が伝わり、とても充実したプログラムだと感じた。
- 質疑応答に本校生徒も参加したが、温かい言葉をかけていただいたのが印象的であった。

プログラム成果

- 訪れた方々とのコミュニケーションを通じて、お互いを知る機会が得られたことが一番の成果であろう。学校や教育に関するシステム的なことはもちろん、直に会うことによる、人や文化への関心・理解が進んだと感じる。
- 本校について見て、知っていただくことで、立教という学校を少しでも多くの方々に知っていただく貴重な機会を得られた。

苦労した点

- 初めてだったので、どのような準備が必要か未知の点が多く不安もあった。

加えるとよいと思われる活動

- ビデオ撮影による、授業や生徒の活動を交換するのはどうだろうか。

プログラム改善に向けた助言

- 校内をご案内する際に小グループに分けたが、その際の通訳を運営側で準備できるようなオプションを設けてはどうだろうか。本校の場合、大学の国際センターを通じて見つけることができたが、場合によっては難しかったかもしれないので。

●小松市立高等学校
教頭　福岡　茂雄

プログラムの全体的な印象

- 日中教職員間のネットワーク構築、相互理解に大変有意義であったと思う。
- 中国の教職員の皆さんの勉強熱心な様子に感心した。また、生徒との懇談の場面では大変和やかで友好的な雰囲気であった。

プログラム成果

- 教職員としては、相互理解を推進することができたのが大きな成果であった。
- 生徒たちも、中国の先生方と直接接することができ、国際理解教育を進めていく上で大きな一歩であった。

苦労した点

- 今回は、英語を解する先生方が少なく個別のコミュニケーションがやや困難であった。

加えるとよいと思われる活動

- 生徒に対して、模擬授業をしていただくような活動ができればよいと思われる。

プログラム改善に向けた助言

- きめ細かい交流をするために、通訳の人数を増やしてくれるとありがたい。

●小松市立丸内中学校
校長　浅野　幸恵

プログラムの全体的な印象

- 施設や恵まれた環境に関心をもたれ、日本では標準的な学校かと質問された。

- 読書活動に興味を示される方が多かった。廊下に展示している歴史の書籍に興味を持たれていた。
- 中国の先生の特別授業で中国の学校や中国の文化に興味を持つことができた。本物を知ることの大切さを実感した。
- 漢字(筆談)でコミュニケーションを取ろうとしている姿をたくさんみることができた。
- 訪問団側からの要望があった方がやりやすいと思った。

プログラム成果

- 英語以外の外国語に触れる機会が少ないので、新鮮で貴重な経験になった。
- 学校全体を見ていただけたので、準備や当日を含め、来客を迎える心構えや他国の人を受け入れようとする意識がさらに高まった。
- コミュニケーションを取ろうとする態度が育ち、言語が通じることの大切さを認識した。
- 中国の先生の授業から、中国についての興味・関心と理解が深まった。
- 中国の文化にふれることで、日本(小松)の文化を見つめなおすことができた。
- 生徒が自分たちで考え判断しようとする姿が多く見られた。

苦労した点

- 中国語がほとんどできないので、会話ができなかった。英語も通じなくて苦しかった。
- 歓迎の規模や程度に迷った。
- 時間通りの進行。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の先生方と一緒に何かをつくる活動
- 給食の準備を一緒に行う。
- 各学級単位での授業交流（通訳の確保が課題）
- クイズ形式でもよいので、中国語を学べる、日本語を教える機会があるとよかったかも。
- 給食時間のような身近な交流の時間を作れればよかった。

付録

1. 実施要項

2. プログラム日程

3. 参加者リスト

4. 関係機関リスト

5. 文部科学省講義資料

6. 過去のプログラム実績

◆付録 1. 実施要項

国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業
中国教職員招へいプログラム

2016 年 1 月 18 日(月)－24 日(日):東京、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市、福岡

実 施 要 項

1．背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、国際連合大学の委託を受け、我が国と中国の教職員間の交流を深め、両国民の相互理解と友好の促進に資するため、国際教育交流事業として 2002 年より中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施しております。さらに、2003 年からは日本国内で訪問した自治体や学校が中国とのさらなる交流を深めることを目的として日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。2015 年 8 月までに中国から招へいした教職員数は延べ 1,490 名にのぼり、日本から訪中した 297 名と合わせ、日中間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきました。

本年度も文部科学省、中国教育部、および熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市の各教育委員会の協力のもと、中国から初等中等教育教職員約 100 名を 3 班に分け、それぞれ 7 日間にわたり、2016 年 1 月 18 日（月）から 1 月 24 日（日）まで本邦に招へいします。

2．目 的

（1） 日本の教育制度および地域の学校教育の現状を中国教職員に紹介すること
（2） 学校等での日中教育関係者の意見交換を通じて、両国の教育の質を高めること
（3） 日中教職員間のネットワーク構築・強化に寄与すること
（4） 中国教職員が日本の文化全般に対する理解を深めること
（5） 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3．日 程

本プログラムは東京、日本各地の受入れ自治体および福岡に於いて、下記の日程で実施される予定です。

日付	日程	訪問先	活動
1 月 18 日（月）	第 1 日	東京	日本到着 オリエンテーション、開会式・歓迎交流会
1 月 19 日（火）	第 2 日	東京	文部科学省講義 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流）
1 月 20 日（水）－22 日（金）	第 3－5 日（3 日間）	3 グループにわかれ、各グループが指定の自治体を訪問	訪問先へ移動 教育長表敬・訪問地教育事情概要説明、 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） 教育文化施設視察
1 月 23 日（土）	第 6 日	福岡	福岡へ移動 報告会・閉会式
1 月 24 日（日）	第 7 日		日本出発

* 第 3～5 日の間、参加者は 3 グループに分かれ、指定された自治体を訪問する。

* 3 グループは各 33 名程度とし、以下のグループ分けとする。
Ａグループ（おもに小中学校教職員）：荒尾市教育委員会（熊本県）
Ｂグループ（おもに小中学校教職員）：長崎市教育委員会（長崎県）
Ｃグループ（おもに中学高校教職員）：小松市教育委員会（石川県）

* 各グループの代表者は、各市での活動について、第 6 日に福岡での報告会で報告する。

4．参加者数

合計 100 名

５．参加資格

（１）中華人民共和国の国民であること。
（２）所属する学校等からの推薦を受けた、初等中等教育の教職員であること。教育行政官及び教育専門家も含む。
（３）日本への関心が高く、日本の教職員との、主に教育分野における交流に高い関心を持つもの。
（４）中国語（普通話）での会話が可能であること。
（５）プログラムの全日程に参加が可能であること。

６．評価と報告

（１）各参加者はACCUの用意する評価票に記入し、最終日にACCUに提出する。
（２）各グループの代表者は、報告会において発表を行う。

７．渡航費等

ACCUは下記の経費を負担する。

（１） 往復航空運賃
北京または上海と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

（２） 宿泊と食事
プログラム期間中の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。食事が提供されない場合については食費の規定額。

（３） 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動時間以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

８．海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

９．通訳

公式プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

１０．申請・推薦手続

中国教育部は、参加者を選定し、プログラム開始約２ヶ月前（11月20日）までに参加者のデータシートおよびパスポートコピーを揃えて、ACCUへ推薦することとする。

１１．このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)　人物交流部
〒162-8484　東京都新宿区袋町６番地　日本出版会館
Tel: 03-3269-4498　　Fax: 03-3269-4510
E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

(1)全体プログラム(東京)

第 1 日(日本到着日)		1 月 18 日(月)
＜復路北京グループ＞		
北京	09:10	北京首都国際空港発(CA925 便)
東京	13:40	成田空港着
	14:40	移動(バス)
	16:10	ホテルメトロポリタンエドモント着(チェックイン)
＜復路上海グループ＞		
北京	08:35	北京首都国際空港発(CA181 便)
東京	12:50	羽田空港着
	13:50	移動(バス)
	14:35	ホテルメトロポリタンエドモント着(チェックイン)
＜全体＞		
東京	16:30-17:30	オリエンテーション(ホテルメトロポリタンエドモント　本館 1 階「クリスタルホール」)
	18:30-20:30	開会式・歓迎交流会(ホテルメトロポリタンエドモント　本館 1 階「クリスタルホール」)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネス
第 2 日		**1 月 19 日(火)**
＜全体＞		
東京	09:00-10:30	講義(ホテルメトロポリタンエドモント　本館 1 階「クリスタルホール」)
＜A グループ＞		
東京	11:20	ホテル発
	11:40-17:00	日本大学豊山中学校・高等学校訪問(昼食交流)
	17:20	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネス
＜B グループ＞		
東京	11:00	ホテル発
千葉	12:15-16:15	市川学園　市川中学校・高等学校訪問(昼食交流)
	17:15	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネス
＜C グループ＞		
東京	11:00	ホテル発
	11:30-17:15	立教池袋中学校・高等学校訪問(昼食交流)
	17:45	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装:ビジネス

通訳：李　英紅（オリエンテーション、開会式・歓迎交流会、講義）

(2)グループプログラム
【グループ A:熊本県荒尾市】

第 3 日		1 月 20 日(水)
東京	08:00	ホテル発(チェックアウト)
		移動(バス)
	09:45	羽田空港発(NH981 便)
佐賀	11:50	佐賀空港着、移動(バス)
大牟田	13:15-14:45	ホテル着、昼食(チェックイン)
	14:45-15:15	移動(バス)
荒尾	15:20-15:50	市長・教育長表敬訪問(荒尾市役所　会議室)
	15:50-16:30	宮崎兄弟生家見学
	16:30-17:20	荒尾市教育委員会概要オリエンテーション(荒尾市役所　会議室)
	18:00-20:00	歓迎交流会(ホテルヴェルデ)
大牟田	20:30	ホテル着
		宿泊先:ホテルニューガイア オームタガーデン、明日の服装:ビジネス
第 4 日		**1 月 21 日(木)**
大牟田	09:10	ホテル発
荒尾	09:45-13:20	荒尾市立荒尾第四中学校訪問(給食交流)
	14:00-16:45	荒尾市立中央小学校訪問
	17:00-17:30	荒尾干潟見学
大牟田	18:00	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルニューガイア オームタガーデン、明日の服装:ビジネス
第 5 日		**1 月 22 日(金)**
大牟田	08:15	ホテル発
荒尾	09:00-10:30	松永日本刀剣鍛錬所見学
	11:00-11:30	万田坑見学
	12:00-13:00	昼食
	13:30-16:40	荒尾市立万田小学校訪問
	16:40-17:40	情報共有会(万田小学校　図書室)
大牟田	18:10	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルニューガイア オームタガーデン、明日の服装:ビジネス

通訳：播磨　愛鈴、幸村　燕
ACCU 随行員：藤本　早恵子

(2)グループプログラム
【グループ B:長崎県長崎市】

第 3 日		1 月 20 日(水)
東京	08:05	ホテル発(チェックアウト)
	09:50	羽田空港発(SNA33 便)
長崎	11:50	長崎空港着、移動(バス)
	12:30-13:30	昼食
	14:30	長崎市役所到着
	14:40-16:40	長崎市教育委員会表敬訪問・長崎市オリエンテーション
		(長崎市役所本館5階　大会議室)
	17:30	ホテル着、チェックイン
	18:30-20:30	歓迎交流会(於:ホテルセントヒル長崎　3階「あじさい」)
	20:45	ホテル着
		宿泊先:長崎ワシントンホテル、明日の服装:ビジネス
第 4 日		**1 月 21 日(木)**
長崎	08:30	ホテル発
	09:00-13:15	長崎市立朝日小学校(給食交流含む)
	13:45-17:00	長崎市立桜馬場中学校(部活見学含む)
	17:30-17:50	世界3大夜景見学(稲佐山)
	18:20	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:長崎ワシントンホテル、明日の服装:ビジネス
第 5 日		**1 月 22 日(金)**
長崎	08:30	ホテル発
	09:00-11:30	長崎市立淵中学校
	12:00-13:00	昼食(出島ワーフ内)
	13:00-14:00	出島(旧和蘭商館)見学
	14:30-15:20	長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館見学
	16:00-17:00	情報共有会(長崎市民会館1階　大会議室)
	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:長崎ワシントンホテル、明日の服装:ビジネス

通訳:鄭　暁穎、王　維婷
ACCU 随行員:有薗　佳子

(2)グループプログラム
【グループ C:石川県小松市】

第 3 日		1 月 20 日(水)
東京	07:40	ホテル発(チェックアウト)
	09:25	羽田空港発(NH753 便)
小松	10:30	小松空港着、移動(バス)
	11:15-11:45	安宅の関見学 (悪天候の場合:石川県航空プラザ見学)※
	12:00-12:45	昼食 (サガミ小松店)
	13:15-14:00	空とこども絵本館※
	14:30-16:30	サイエンスヒルズこまつ
	16:45	ホテル着、チェックイン、夕食(各自)
		宿泊先:アパホテル<小松グランド>、明日の服装:カジュアル
第 4 日		**1 月 21 日(木)**
小松	09:00	ホテル発
	09:30-10:00	小松市市長表敬訪問
	10:20-11:30	小松市概要オリエンテーション
	12:00-13:00	昼食 (レストラン四季彩)
	13:30-17:00	小松市立高校
	18:30-20:30	市主催歓迎交流夕食会(ホテルサンルート小松)
	20:15	ホテル着
		宿泊先:アパホテル<小松グランド>、明日の服装:ビジネス
第 5 日		**1 月 22 日(金)**
小松	08:45	ホテル発
	09:00-10:00	施設見学(こまつ曳山交流館みよっさ)
	10:30-16:40	小松市立丸内中学校
	17:00-18:00	グループ内情報共有会(小松市教育センター)
	18:15	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:アパホテル<小松グランド>、明日の服装:ビジネス

通訳:程 曦、劉 璐姍　　※悪天候のため、訪問中止
ACCU 随行員:齋藤 盛午

(3)全体プログラム(福岡)

第 6 日		1 月 23 日(土)
<A グループ>		
大牟田	10:30	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス)
<B グループ>		
長崎	09:30	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス)
<C グループ>		
小松	08:00	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス)
福岡	09:30-10:55	小松空港発、福岡空港着(NH3183 便)
<全体>		
福岡	12:00-13:00	昼食
	14:00-16:15	報告会　閉会式(TKP 博多駅前シティセンター 「ホール C」)
	16:45	ホテル着、チェックイン
		夕食(各自)
		宿泊先:キャナルシティ福岡ワシントンホテル、明日の服装:カジュアル
第 7 日		**1 月 24 日(日)**
<全体>		
福岡	09:45	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス)
	10:30-11:30	太宰府天満宮散策※
	11:30-12:15	昼食
<復路北京グループ>		
福岡	12:15-12:40	門前町散策※
	13:10	福岡空港着
	15:10	福岡空港発(CA954 便)　大連経由北京行
北京	18:35	北京首都国際空港着
<復路上海グループ>		
福岡	12:15-13:10	門前町散策※
	13:40	福岡空港着
	15:40	福岡空港発(CA916 便)　上海行
上海	16:25	上海浦東国際空港着

※悪天候のため、訪問中止

◆付録3.　参加者リスト

(1)Aグループ33名

★団長　：A-1 趙海峰(ZHAO Haifeng)
☆副団長：B-1 步　嵐(BU Lan)
●グループ長：A-12 王淑萍(WANG Shuping)
○秘書長　　：A-2 陳会林(CHEN Huilin)

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		職务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★A-1	赵海峰	趙海峰	ZHAO Haifeng	男	甘肃省教育厅	甘肃省教育庁	处长	処長
○A-2	陈会林	陳会林	CHEN Huilin	男	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	項目官員
A-3	李万瑞	李万瑞	LI Wanrui	男	甘肃省兰州实验小学	甘肃省蘭州実験小学	副校长	副校長
A-4	李向荣	李向栄	LI Xiangrong	男	甘肃省兰州市第十二中学	甘肃省蘭州市第十二中学	校长	校長
A-5	王建萍	王建萍	WANG Jianping	女	甘肃省兰州市西固区福利路第二小学	甘肃省蘭州市西固区福利路第二小学	校长	校長
A-6	卢迎福	盧迎福	LU Yingfu	男	甘肃省兰州市城关区泰安路小学	甘肃省蘭州市城関区泰安路小学	校长	校長
A-7	潘一望	潘一望	PAN Yiwang	女	甘肃省兰州市安宁区万里小学	甘肃省蘭州市安寧区万里小学	校长	校長
A-8	马元顺	馬元順	MA Yuanshun	男	甘肃省兰州市西固区玉门街第二小学	甘肃省蘭州市西固区玉門街第二小学	副校长	副校長
A-9	宋林生	宋林生	SONG Linsheng	男	甘肃省兰州市第三十五中学	甘肃省蘭州市第三十五中学	校长	教師
A-10	强燕纹	強燕紋	QIANG Yanwen	女	甘肃省兰州市第三十七中学	甘肃省蘭州市第三十七中学	教师	教師
A-11	范玲芳	範玲芳	FAN Lingfang	女	甘肃省兰州市七里河区王家堡小学	甘肃省蘭州市七里河区王家堡小学	校长	校長
●A-12	王淑萍	王淑萍	WANG Shuping	女	宁夏教育厅	寧夏教育庁	副处长	副処長
A-13	莫迎春	莫迎春	MO Yingchun	男	宁夏教育厅	寧夏教育庁	主任科员	主任科員
A-14								
A-15	景小云	景小雲	JING Xiaoyun	女	宁夏长庆小学	寧夏長慶小学	教务主任	教務主任
A-16	胡永峰	胡永峰	HU Yongfeng	女	宁夏长庆初级中学	寧夏長慶初級中学	教师	教師
A-17	任　浩	任　浩	REN Hao	男	宁夏固原市弘文中学	寧夏固原市弘文中学	校长	校長
A-18	者永生	者永生	ZHE Yongsheng	男	宁夏泾源县第一中学	寧夏泾源県第一中学	副校长	副校長
A-19	褚万宗	褚万宗	CHU Wanzong	男	宁夏固原市回民中学	寧夏固原市回民中学	教务处主任	教務処主任
A-20	黄志平	黄志平	HUANG Zhiping	男	宁夏石嘴山市第二小学	寧夏石嘴山市第二小学	校长	校長
A-21	孙　华	孫　華	SUN Hua	男	宁夏灵武市第五小学	寧夏灵武市第五小学	校长	校長
A-22	魏振华	魏振華	WEI Zhenhua	男	西安市教育局	西安市教育局	副主任	副主任
A-23	陈　东	陳　東	CHEN Dong	女	西安市第85中学	西安市第85中学	教师	教師
A-24	任艳萍	任艶萍	REN Yanping	女	西安市第30中学	西安市第30中学	德育主任	德育主任
A-25	牛西运	牛西運	NIU Xiyun	男	陕西省西安师范附属小学	陝西省西安師範附属小学	副校长	副校長
A-26	卢　焱	盧　焱	LU Yan	女	西安市雁塔区翠华路小学	西安市雁塔区翠華路小学	教师	教師
A-27	范　勇	範　勇	FAN Yong	男	西安高新第一中学	西安高新第一中学	艺术中心副主任	芸術センター副主任
A-28	杨文花	楊文花	YANG Wenhua	女	西安高新第一中学	西安高新第一中学	校长助理	校長補佐
A-29	任希林	任希林	REN Xilin	男	西安交大附中	西安交大附中	主任	主任
A-30	穆春华	穆春華	MU Chunhua	男	西安交大附中	西安交大附中	教师	教師
A-31	杨盛梅	楊盛梅	YANG Shengmei	女	西安交大附小	西安交大附小	教师	教師
A-32	赵　洪	趙　洪	ZHAO Hong	女	河北省石家庄市第二中学	河北省石家庄市第二中学	副校长	副校長
A-33	韩仁孝	韓仁孝	HAN Renxiao	男	甘肃省兰州市教育局	甘肃省蘭州市教育局	副组长	副組長
A-34	徐丽兰	徐麗蘭	XU Lilan	女	华中师范大学附属小学	華中師範大学附属小学	教师	教師

(2) Bグループ32名

★団長　：A-1 趙海峰(ZHAO Haifeng)
☆副団長：B-1 歩　嵐(BU Lan)
●グループ長：B-22 郭立森(GUO Lisen)
○秘書長　　：B-2 陳文捷(CHEN Wenjie)

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
☆B-1	步　岚	歩　嵐	BU Lan	女	贵州省教育厅	貴州省教育庁	处长	処長
○B-2	陈文捷	陳文捷	CHEN Wenjie	女	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	項目官員
B-3	姚　玲	姚　玲	YAO Ling	女	贵阳市第十八中学	貴阳市第十八中学	教师	教師
B-4	何秀珍	何秀珍	HE Xiuzhen	女	贵阳市第十九中学	貴阳市第十九中学	教研组长	教研組長
B-5	冯年林	馮年林	FENG Nianlin	男	北京师范大学贵阳附属中学	北京師範大学貴阳附属中学	校长助理兼办公室主任	校長補佐兼事務室主任
B-6	沈　力	沈　力	SHEN Li	男	贵阳市新世界国际学校	貴阳市新世界国際学校	教师	教師
B-7	金　弋	金　弋	JIN Yi	女	贵阳市南明区南明小学	貴阳市南明区南明小学	总务主任	総務主任
B-8	卢　萍	盧　萍	LU Ping	女	贵阳市环西小学	貴阳市環西小学	副教导处主任	副教導処主任
B-9	王秀珍	王秀珍	WANG Xiuzhen	女	北京师范大学贵阳附属小学	北京師範大学貴阳附属小学	教师	教師
B-10	蒙生雄	蒙生雄	MENG Shengxiong	男	荔波县第一小学	荔波県第一小学	后勤主任	後方勤務主任
B-11	杨光莉	楊光莉	YANG Guangli	女	六枝特区实验小学	六枝特区実験小学	教师	教師
B-12	格日乐图	格日楽図	GERILETU	男	内蒙古自治区教育厅	内モンゴル自治区教育庁	副主任	副主任
B-13	乌仁图亚	烏仁図亜	WURENTUYA	女	内蒙古师范大学附属中学	内モンゴル師範大学附属中学	校长	校長
B-14	余泽强	余澤強	YU Zeqiang	男	呼和浩特市教育局	フフホト市教育局	副局长	副局長
B-15	刘新正	劉新正	LIU Xinzheng	男	呼和浩特市第二十九中学	フフホト市第二十九中学	校长	校長
B-16	张瑞清	張瑞清	ZHANG Ruiqing	男	呼和浩特市第十七中学	フフホト市第十七中学	校长	校長
B-17	张宝琴	張宝琴	ZHANG Baoqin	女	呼和浩特市玉泉区五塔寺东街小学	フフホト市玉泉区五塔寺東街小学	校长	校長
~~B-18~~								
B-19	侯振河	侯振河	HOU Zhenhe	男	内蒙古北方重工业集团有限公司第一中学	内モンゴル北方重工業集団有限公司第一中学	校长	校長
B-20	耿红丽	耿紅麗	GENG Hongli	女	包钢第二中学	包鋼第二中学	校长	校長
B-21	闫华英	閆華英	YAN Huaying	女	包头市昆都仑区团结大街第四小学	包頭市昆都侖区団結大街第四小学	校长	校長
●B-22	郭立森	郭立森	GUO Lisen	男	河北省教育厅	河北省教育庁	副处长	副処長
B-23	郭秀琴	郭秀琴	GUO Xiuqin	女	石家庄市维明路小学	石家庄市維明路小学	校长	校長
B-24	刘君英	劉君英	LIU Junying	男	石家庄市东风小学	石家庄市東風小学	校长	校長
B-25	杨富兴	楊富興	YANG Fuxing	男	河北师范大学附属小学	河北師範大学附属小学	校长	校長
B-26	宋秋芳	宋秋芳	SONG Qiufang	女	石家庄市水源街小学	石家庄市水源街小学	副校长	副校長
B-27	赵　艳	趙　艶	ZHAO Yan	女	石家庄市西苑小学	石家庄市西苑小学	副校长	副校長
B-28	张秀玲	張秀玲	ZHANG Xiuling	女	石家庄市28中学	石家庄市28中学	校长	校長
B-29	冯藏璞	馮藏璞	FENG Zangpu	女	石家庄市第40中学	石家庄市第40中学	副校长	副校長
B-30	张秀英	張秀英	ZHANG Xiuying	女	石家庄市第42中学	石家庄市第42中学	副校长	副校長
B-31	徐永辉	徐永輝	XU Yonghui	男	廊坊第八高级中学	廊坊第八高級中学	校长	校長
B-32	杨冬菊	楊冬菊	YANG Dongju	女	华中师范大学附属小学	華中師範大学附属小学	教导主任	教導主任
B-33	刘　峥	劉　崢	LIU Zheng	男	华中师范大学附属小学	華中師範大学附属小学	教科室主任	教科室主任

(3) Cグループ33名

★団長　：A-1 趙海峰(ZHAO Haifeng)
☆副団長：B-1 歩 嵐(BU Lan)
●グループ長：C-1 鄭德新(ZHENG Dexin)
○秘書長　　：C-30 李彦春(LI Yanchun)

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		職务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
●C-1	郑德新	鄭德新	ZHENG Dexin	男	安徽省教育厅	安徽省教育庁	调研员	調研員
C-2	刘　飞	劉　飛	LIU Fei	男	安徽省教育厅	安徽省教育庁	主任科员	主任科員
C-3	王东升	王東昇	WANG Dongsheng	男	安徽省铜陵市第十五中学	安徽省銅陵市第十五中学	副校长	副校長
C-4	丁　震	丁　震	DING Zhen	男	安徽省铜陵市第九中学	安徽省銅陵市第九中学	副校长	副校長
C-5	吴文彬	吳文彬	WU Wenbin	男	安徽省铜陵市教育局	安徽省銅陵市教育局	科长	科長
C-6	宋宪宏	宋憲宏	SONG Xianhong	男	安徽省铜陵市第七中学	安徽省銅陵市第七中学	副校长	副校長
C-7	孙长瑜	孫長瑜	SUN Changyu	男	安徽省马鞍山市第一中学	安徽省馬鞍山市第一中学	副书记	副書記
C-8	高　平	高　平	GAO Ping	男	安徽省马鞍山市第七中学	安徽省馬鞍山市第七中学	副校长	副校長
C-9	张步力	張步力	ZHANG Buli	男	安徽省马鞍山市和县第四中学	安徽省馬鞍山市和県第四中学	校长	校長
C-10	黄玉好	黄玉好	HUANG Yuhao	男	安徽省马鞍山外国语学校	安徽省馬鞍山外国語学校	校长助理	校長補佐
C-11	黎江玲	黎江玲	LI Jiangling	女	华中师范大学第一附属中学初中部	華中師範大学第一附属中学初中部	教师	教師
C-12	李鼎盛	李鼎盛	LI Dingsheng	男	华中师范大学第一附属中学初中部	華中師範大学第一附属中学初中部	教师	教師
C-13	舒清芳	舒清芳	SHU Qingfang	女	华中师范大学第一附属中学初中部	華中師範大学第一附属中学初中部	教师	教師
C-14	蒋大桥	蔣大橋	JIANG Daqiao	男	华中师范大学第一附属中学	華中師範大学第一附属中学	教师	教師
C-15	赵　萍	趙　萍	ZHAO Ping	女	华中师范大学第一附属中学	華中師範大学第一附属中学	教师	教師
C-16	卢记生	盧記生	LU Jisheng	男	华中师范大学第一附属中学	華中師範大学第一附属中学	教师	教師
C-17	李　萍	李　萍	LI Ping	女	华中师范大学	華中師範大学	七级职员	七級職員
C-18	殷雅竹	殷雅竹	YIN Yazhu	女	江苏省教育厅	江蘇省教育庁	副处长	副処長
C-19	颜海红	顔海紅	YAN Haihong	女	江苏省淮阴中学	江蘇省淮陰中学	副主任	教師
C-20	蒋　飞	蔣　飛	JIANG Fei	男	江苏省淮州中学	江蘇省淮州中学	主任	教師
C-21	陈　玉	陳　玉	CHEN Yu	女	淮阴师范学院附属中学	淮陰師範学院附属中学	副主任	教師
C-22	窦正虎	窦正虎	DOU Zhenghu	男	江苏省清江中学	江蘇省清江中学	主任	教師
C-23	高祝芹	高祝芹	GAO Zhuqin	男	江苏省淮安市洪泽县教育局	江蘇省淮安市洪澤県教育局	局长	局長
C-24	高云海	高雲海	Gao Yunhai	男	江苏省淮安市淮安区教育局	江蘇省淮安市淮安区県教育局	副局长	副局長
C-25	李晓燕	李暁燕	LI Xiaoyan	女	江苏省淮安市第一中学	江蘇省淮安市第一中学	教师	教師
C-26	张成桃	張成桃	ZHANG Chengtao	男	江苏省淮安市盱眙县第二中学	江蘇省淮安市盱眙県第二中学	教师	教師
C-27	李仁才	李仁才	LI Rencai	男	江苏省淮安市金湖县外国语学校	江蘇省淮安市金湖県外国語学校	副主任	教師
C-28	马秉禄	馬秉禄	MA Binglu	男	甘肃省兰州市第五十五中学	甘粛省蘭州市第五十五中学	校长	校長
C-29	陈宝亭	陳宝亭	CHEN Baoting	男	甘肃省兰州市第三十一中学	甘粛省蘭州市第三十一中学	校长	校長
○C-30	李彦春	李彦春	LI Yanchun	女	北京青年报社	北京青年報社	培训主管	研修主管
C-31	翟丽光	翟麗光	ZHAI Liguang	女	河北省石家庄市第一中学	河北省石家庄市第一中学	副校长	副校長
C-32	陈咏利	陳咏利	CHEN Yongli	男	贵州省贵阳市教育局	貴州省貴陽市教育局	处长	処長
C-33	赵艳	趙艶	ZHAO Yan	女	贵州省实验中学	貴州省実験中学	教师	教師

◆付録 4. 関係機関リスト

（1） 全体プログラム

国際連合大学（UNU）
〒150-8925　東京都渋谷区神宮前 5-53-70
TEL: 03-5467-1212
URL: http://jp.unu.edu/

文部科学省（MEXT）
大臣官房国際課
〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2
TEL: 03-5253-4111
URL: http://www.mext.go.jp

中華人民共和国教育部
国際協力交流局アジア・アフリカ課
〒100-816 中国北京市西単大木仓胡同 37 号
TEL: +86-10-6609-6650
URL: http://www.moe.edu.cn/

中華人民共和国駐日本国大使館
〒106-0046 東京都港区元麻布 3-4-33
TEL: 03-3403-3388
URL: http://www.china-embassy.or.jp/jpn/

中華人民共和国駐日本国大使館教育処
〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9
TEL: 03-3643-0305
URL: http://www.china-embassy.or.jp/jpn/

中華人民共和国駐福岡総領事館
〒810-0065 福岡県福岡市中央区地行浜 1-3-3
TEL: 092-713-1121
URL: http://www.chn-cousulate-fukuoka.or.jp

在中華人民共和国日本国大使館
〒100-600 中国北京市朝陽区亮馬橋東街 1 号
TEL: +86-10-8531-9800
URL: http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

外務省
大臣官房国際文化協力室
〒100-8919 東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1
TEL: 03-3580-3311
URL: http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html

（2） グループ・プログラム（受入れ自治体）

A. 熊本県荒尾市教育委員会
教育長職務代理者：境　民子
担当者：教育振興課　指導主事　上原　泰
〒864-8686 熊本県荒尾市宮内出目 390
TEL: 0968-62-1256　FAX: 0968-62-1218　URL: http://www.city.arao.lg.jp/

B. 長崎県長崎市教育委員会
教育長：馬場　豊子
担当者：学校教育課　指導主事　久松　千樹
〒850-8685　長崎県長崎市桜町 2-22
TEL: 095-829-1195　FAX: 095-829-1298
URL: http://www.city.nagasaki.lg.jp/

C. 石川県小松市教育委員会
教育長：石黒　和彦
担当者：学校教育課　指導主事　東口　幸央
〒923-8650　石川県小松市小馬出町 91
TEL: 0761-24-8122　FAX: 0761-23-3563
URL: http://www.city.komatsu.lg.jp/4998.htm

★実施団体
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6　日本出版会館
TEL: 03-3269-4498　FAX: 03-3269-4510
Email: exchange@accu.or.jp　URL: http://www.accu.or.jp

田村　哲夫
理事長

木曽　功
理事

二ノ宮　正和
総務部　部長

進藤　由美
人物交流部　部長

有薗　佳子
人物交流部　事務専門員

齋藤　盛午
人物交流部　事務専門員

藤本　早恵子
人物交流部　事務専門員

河口　枝里子
プロジェクトスタッフ

唐　詩
プロジェクトスタッフ

（所属・肩書はプログラム実施時のもの）

◆付録 5. 文部科学省講義資料

日本の初等中等教育の概要

文部科学省 初等中等教育局
時枝 正和
平成27年1月19日

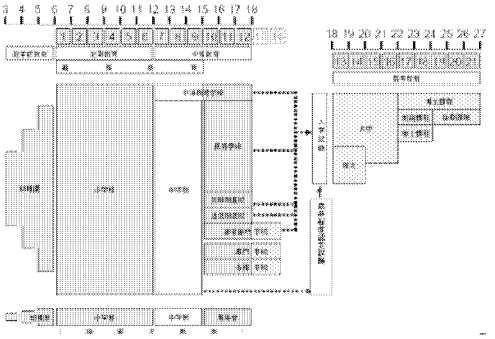
文部科学省

講演の構成

Ⅰ. 日本の初等中等教育制度・・・・・・・・・・・・3
Ⅱ. 日本の教育政策の一部の紹介・・・・・・・・14

Ⅰ. 日本の基本的な初等中等教育制度

学校体系

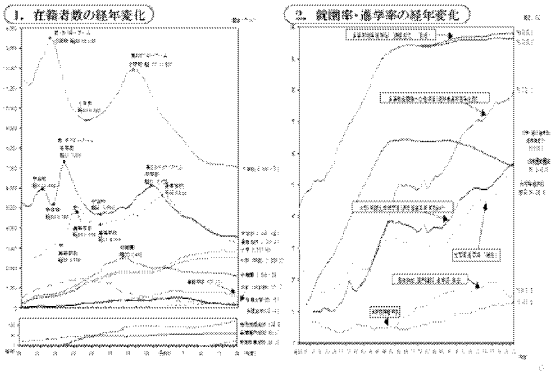


学校数、生徒、教員数

		学校数	生徒数	教員数
幼稚園		13,000	160万人	11万人
小学校	6 年	21,000	660万人	42万人
中学校	3 年	11,000	350万人	25万人
高等学校	3 年	5,000	330万人	24万人
中等教育学校	6 年	50	3万人	2,400
特別支援学校		1,100	14万人	8万人

出典 平成26年度 学校基本調査

在籍者数、就園率・就学率の経年変化



義務教育制度の概要

憲　法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

第5条　国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2　義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

3　国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

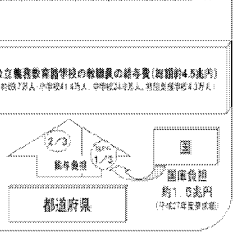
4　国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

7

義務教育費国庫負担制度の概要

●憲法の要請に基づき、義務教育の根幹（機会均等、水準確保、無償制）を国が責任をもって支える制度。
●市町村が小中学校を設置・運営。
●都道府県が教職員を任命し、給与を負担。
●国は教職員給与費の1／3を負担。

公立義務教育諸学校の教職員の給与費（総額約4.5兆円）
（教職員数：小学校約45万人、中学校約24万人、特別支援学校約4万人）

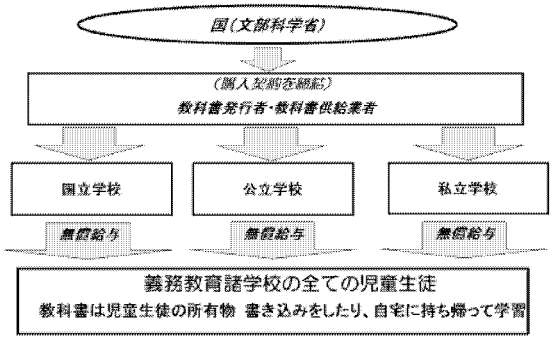


【教員の給与】

●人材確保法は、教員に優れた人材を確保し、もって義務教育水準の維持向上を図ることを目的として、教員の給与を一般の公務員より優遇することを定めている。

8

教科書無償給与制度



9

教員養成・免許制度の概要

【免許状主義】

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

養成
- 大学における養成が原則
- 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担任し、教科指導、生徒指導等を実践するために必要な基礎的な資質能力を養成

採用
- 都道府県・指定都市教育委員会等による採用選考試験を実施
- 多面的な人物評価の一層の推進
  - 面接試験・実技試験の重視
  - 様々な社会体験等の評価

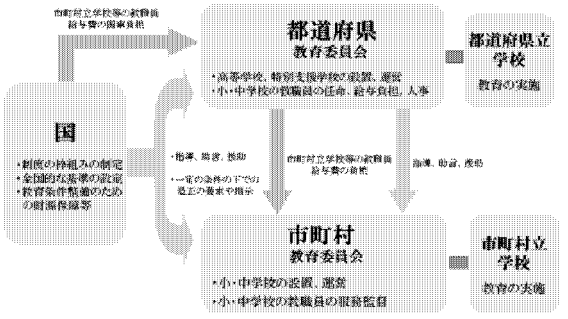
研修
- 都道府県教育委員会等における研修
  - 初任者研修　・10年経験者研修　等
- 国（教員研修センター）における研修
  - 各地域において中心的な役割を担う教職員に対する学校運営研修
  - 教科の専門課題研修　等

適切な人事管理
- 指導が不適切な教員に対する人事管理システム　の適切な運用
- 教員評価システム　●　優秀教員表彰

免許更新制
- 教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることが目的
- 免許状に10年の有効期間を定める

10

教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）

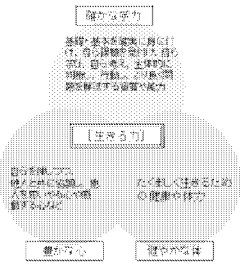


11

学習指導要領とは

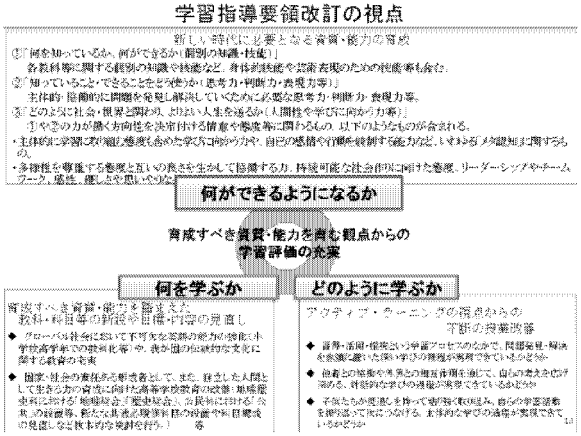
全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省では、学校教育法等に基づき、各学校で教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準を定めています。これを「学習指導要領」といいます。

「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めています。また、これとは別に、学校教育法施行規則で、例えば小・中学校の教科等の年間の標準授業時数等が定められています。各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実情に応じて、教育課程（カリキュラム）を編成しています。

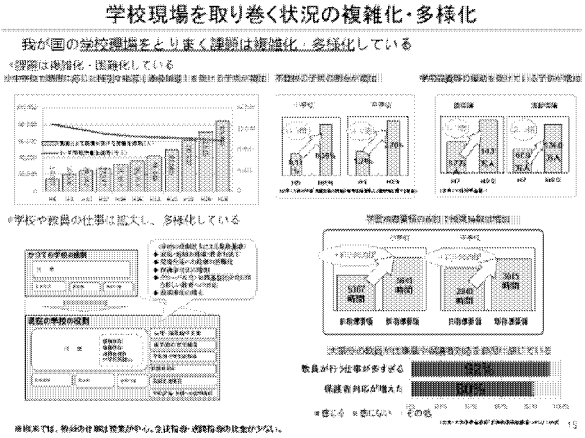


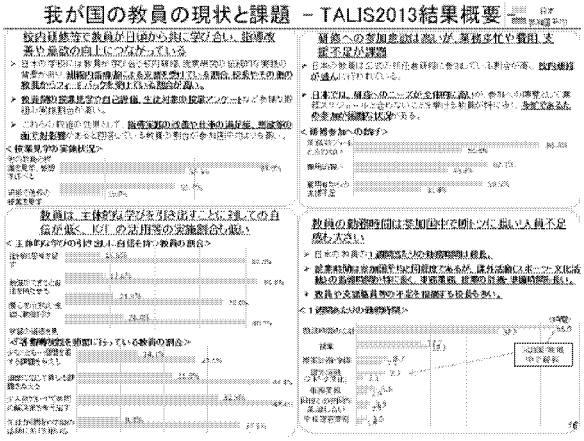
現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

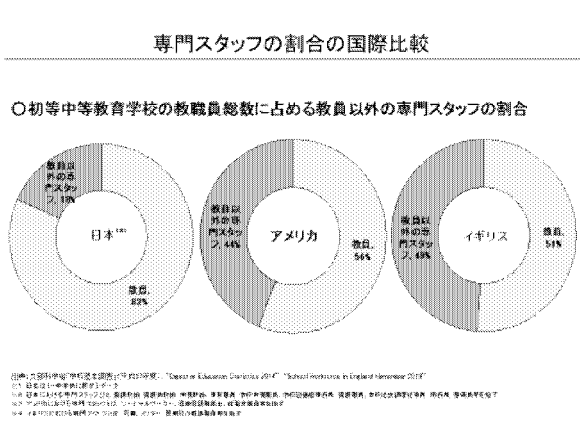
12

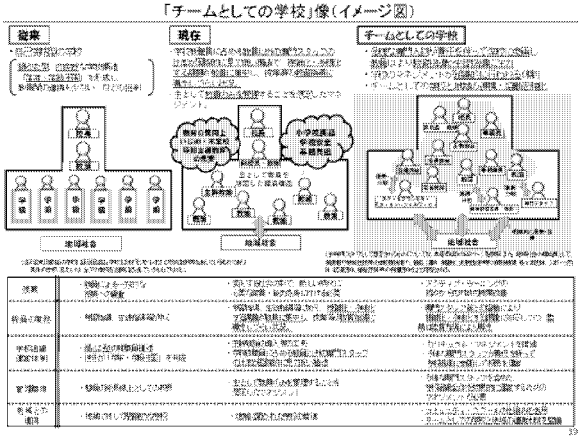


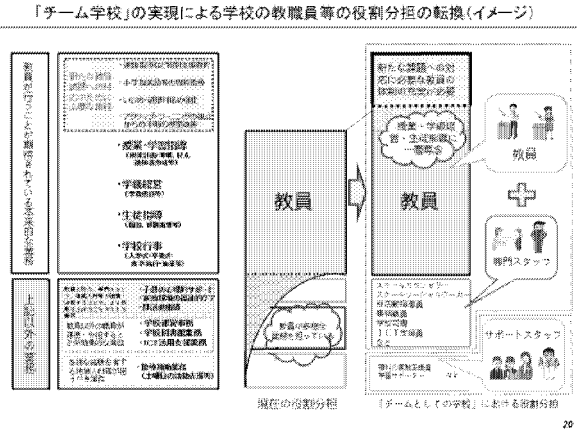
Ⅱ. 日本の教育政策の一部の紹介
i）チーム学校











Ⅱ．日本の教育政策の一部の紹介
ii）全国学力・学習状況調査

全国的な学力調査

1．全国学力・学習状況調査（平成１９年度～）の概要

○ 調査の目的

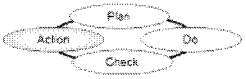
・国としては、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の改善・充実に活かす

・教育委員会としては、自治体や学校の学力水準を検証し、教育委員会の施策の改善・充実に活かす

・学校としては、個々の児童生徒の学習状況を把握して指導に活かすとともに、学校全体として指導方法の検証・改善につながる

○ 調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年



○ 調査内容

①教科に関する調査（国語A・B、算数・数学A・B）

A：主として「知識」に関する問題、B：主として「活用」に関する問題

※24年度・27年度は「理科」を追加。理科は3年に一度の実施

②生活習慣や学習習慣等に関する質問紙調査（児童生徒に対する調査／学校に対する調査）

2．平成２７年度調査【悉皆調査】（全児童生徒参加）

○ 調査日：平成27年4月21日（火）　○結果公表日：平成27年8月25日（火）

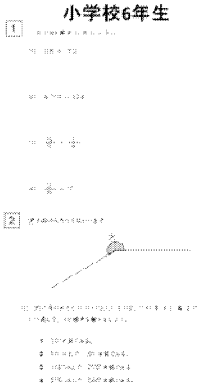
・国語、算数・数学に理科を追加した3教科で悉皆調査を実施

3．英語４技能を測定する「全国的な学力調査」の検討

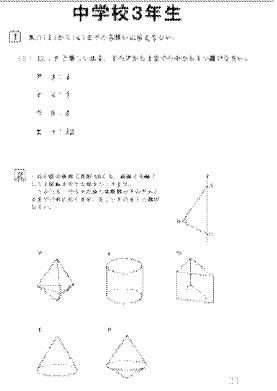
○ 「聞く」「話す」「読む」「書く」の英語4技能について、平成31年度の実施に向けて検討

問題例

小学校6年生



中学校3年生



不利な環境を克服している児童生徒の特徴（平成26年度委託研究）

調査の概要

※ 本研究は、平成25年度全国学力・学習状況調査の追加調査として実施した「保護者に対する調査」の結果を活用し、家庭状況と学力の関係、不利な環境にも関わらず成果を上げている学校や児童生徒の属性を分析

（保護者に対する調査の概要）

調査対象：抽出した公立学校において、本研究を実施した学級担任の保護者

調査時期：平成25年11月下旬～12月下旬

調査内容：子供への接し方、子供の教育に対する考え方、教育費等

	抽出校		参考校	
	対象者	有効回収数（率）	対象者	有効回収数（率）
中学校	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
中学校	30,904	[illegible]（44.1%）	410	[illegible]（[illegible]%）

分析結果の概要

家庭の社会経済的背景と学力の関係

※ 家庭の社会経済的背景（SES）が高い児童生徒の方が、各教科の平均正答率が高い傾向が見られる。

	中学校				中学校			
	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
Lowest SES	53.9	39.6	48.6	47.7	79.7	64.8	54.4	31.5
Lower middle SES	60.1	46.1	56.2	54.1	75.2	66.0	62.0	36.4
Upper middle SES	63.9	51.4	70.0	63.3	78.6	70.3	67.6	44.0
Highest SES	72.7	60.7	83.4	76.3	81.8	74.1	75.5	49.4

※ 家庭の社会経済的背景（SES）：学習状況に関する調査結果から、家族所得、父親学歴、母親学歴の三つの変数を合成した指標

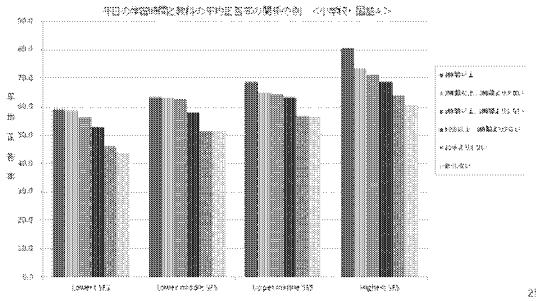
各生徒を高い方から、Highest SES、Upper middle SES、Lower middle SES、Lowest SES に分割して分析

24

不利な環境を克服している児童生徒の特徴（平成26年 度委託研究）

- 家庭の社会経済的背景（SES）と子供の学力との間には強い相関がみるが、家庭の社会経済的背景（SES）が低いからといって、必ずしも全ての子供の学力が低いわけではない。
- 子供の学習時間は、全ての家庭の社会経済的背景（SES）で学力との関係が見られ、学習時間は不利な環境を克服する要因の一つと考えられる。

平日の学習時間と教科の平均正答率の関係の例 （小学校・国語A）



25

不利な環境を克服している児童生徒の特徴（平成26年 度委託研究）

- Lowest SES でかつ学力が高い（A層）児童生徒には、以下の特徴が見られる。

＊学力差の大きい教科を抽出して分析

□ 朝食等の生活習慣
- 朝食を毎日食べている
- 朝目が覚めるのを自分で起きている
- テレビ等を見る時間やテレビゲームをする時間が少ない

□ 読書や読み聞かせ
- 保護者が子供にまや新聞を読むようにすすめている
- 子供が小さい頃に絵本の読み聞かせをした
- 子供と一緒に図書館に行く

□ 勉強や成績に関する会話・学習習慣・学校外教育投資
- 保護者が子供と勉強や成績のことについて話をする
- 保護者の高い学歴への憧れ
- 子供への教育投資額が多い

□ 保護者自身の行動
- 授業参観や運動会などの学校行事への参加

□ 児童生徒の学習習慣と学校規則への態度
- 宿題自分で計画を立てて勉強している
- 学校の規則を守っている
- 学校の規則を守っている　など

□ 学校での学習指導
- 自分の考えを発表する機会が与えられている
- 家庭学習の課題の与え方について教職員で共通理解を図る

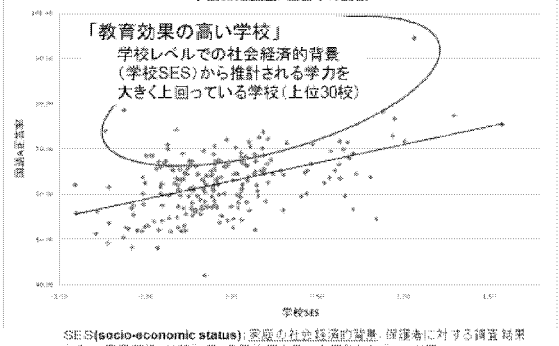
※小学校

26

教育効果の高い学校（平成26年 度委託研究）

平成26年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」「効果的な授業方法に関する調査研究」 広島大学大学

学校SESと国語A正答率の関係



SES(socio-economic status)：家庭の社会経済的背景。保護者に対する調査結果から、家庭所得、父親学歴、母親学歴の三つの変数を合成した指標

27

教育効果の高い学校（平成26年 度委託研究）

平成26年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」「効果的な授業方法に関する調査研究」 広島大学大学

①表現力・課題探究力の向上
- 例：児童が自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導

②授業スタイル
- 例：授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れた

③家庭学習の指導
- 例：算数の指導として、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか

④学力調査の活用
- 例：全国学力・学習状況調査等の結果を学校全体で教育活動を改善するために活用したか

⑤少人数・TT・補充学習
- 例：算数の授業において、習熟度別の少人数指導を行うに当たって、学習集団をどう編制したか

⑥学校外リソースの活用
- 例：地域の人材を外部講師として招聘した授業を行ったか

⑦実践的研修・研修成果の活用
- 例：教職員が校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させているか

28

◆付録 6. 過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
第 1 回:2002 年 12 月 1 日～14 日	東京都、和歌山県、岡山県、広島県、高知県、大阪府、京都府	97 名
第 2 回:2003 年 11 月 26 日～12 月 9 日	東京都、熊本県、愛知県、島根県、徳島県、大阪府、京都府、奈良県	100 名
第 3 回:2004 年 11 月 18 日～12 月 1 日	東京都、宮城県、長崎県、宮崎県、沖縄県、大阪府、京都府、奈良県	99 名
第 4 回:2005 年 10 月 18 日～31 日	東京都、長野県、福井県、和歌山県、宮崎県、大阪府	101 名
第 5 回:2006 年10 月 18 日～31 日	東京都、千葉県八街市、埼玉県、岐阜県、高知県、山口県柳井市、大阪府、奈良県	135 名
第 6 回:2007 年 10 月 16 日～29 日	東京都、千葉県八街市、岡山県総社市、富山県南砺市、三重県、岐阜県、大阪府、奈良県	135 名
第 7 回:2008 年 10 月 14 日～27 日	東京都、宮城県気仙沼市、福島県、京都府与謝野町、香川県、福岡県北九州市、大阪府、京都府	133 名
第 8 回:2009 年10 月 13 日～26 日	東京都、岡山県総社市、熊本県植木町、沖縄県那覇市、千葉県成田市、埼玉県さいたま市、大阪府、京都府	142 名
第 9 回:2010 年 10 月 12 日～25 日	東京都、秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、長崎県、大阪府、京都府	130 名
第 10 回:2011 年 10 月 12 日～23 日	東京都、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、岡山県総社市、徳島県、大阪府、京都府	134 名
第 11 回: 第 1 班:2013 年 11 月 13 日～24 日 第 2 班:2013 年 12 月 1 日～10 日	第 1 班: 東京都、大阪府 第 2 班: 東京都	第 1 班: 50 名 第 2 班: 49 名
第 12 回:2013 年 10 月 20 日～28 日	東京都、熊本県荒尾市、岡山県総社市、長崎県長崎市、和歌山県、大阪府	59 名
第 12 回:(追加プログラム) 2014 年 9 月 21 日～29 日	東京都	29 名
第 13 回: 第 1 班:2014 年 10 月 19 日～27 日 第 2 班:2014 年 11 月 16 日～24 日	第 1 班: 東京都、東京都多摩市 第 2 班: 東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、福岡県	第 1 班: 34 名 第 2 班: 63 名
第 14 回:2016 年 1 月 18 日～24 日	**東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市、福岡県**	**98 名**

計 1, 588 名

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

2016 年 3 月
編集・発行

国際連合大学(UNU)
〒150-8925
東京都渋谷区神宮前 5-53-70
電話　(03) 5467-1212
URL　http://jp.unu.edu/

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
〒162-8484
東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
電話　(03) 3269-4498
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Waco Inc. [130]
ⓒ2016 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)